

著書の紹介と翻訳

『国替えを余儀なくされた男』

ツヴェタン・トドロフ Seuil, octobre 1996

川 神 傳 弘

トドロフはロラン・バルトの下で記号学を学んだ構造主義文学研究の魁の一人であり、『小説の記号学——文学と意味作用』を初めとして数多の象徴理論・記号学の著作で知られている。しかしわれわれがより以上に関心を寄せるのは、彼が東西冷戦下ソ連の衛星国ブルガリアで少壮期を送った体験に触発された文明批評家としての側面である。ここに紹介する『国替えを余儀なくされた男』は、共産主義による一党独裁の全体主義体制の過酷な条件下で生活した自らの体験をふまえて全体主義と民主主義を比較・分析した論考である。

近々日本での上映が予定されている、一九四〇年ソ連軍が二万人以上のポーランド軍将校を虐殺した事件を描いた映画『カチンの森』を撮ったアンジェイ・ワイダ監督は「全体主義体制は人間を単純労働力とみなして抑圧し、迫害し、必要なくなれば抹殺する」と語っている（読売新聞 二〇〇九年一月一〇日）。トドロフも「カチンの森」事件に触れているが、スターリンの支配以降存続した「壁」が崩壊し、鉄のカ

ーテンが引き下ろされるまで、長期に涉つて全体主義体制の多くの国では、密告、追放、強制収容所送り、暴力、拷問、虐殺によつて人民が塗炭の苦しみに喘いだ事実が提示する全体主義の問題を、民主主義体制と比較しつつ、歴史的、宗教的、民族的、文化的等の様々な角度から冷静に分析している。

残念ながら紙数に限りがあるので全文を翻訳紹介することは出来ないが、冒頭部分をお読み戴き、特にパリ亡命後一八年間も彼を悩ませ続けた悪夢がどれほどのものであったかに思いを馳せていただきたい。また、党中枢部の奨励する密告制度によつて強制収容所送りとなる恐怖に脅えながら送る生活や、収容所内での暴力、拷問、虐殺がどのようなメカニズムで生まれるのかを知ることが、人間の心性の奥底に潜む「悪」を白日の下に晒すことによつて、「ヒューマニズムとは何であるのか」の再考を迫る契機となるはずである。

国替えを余儀なくされた男

ツヴェタン・トドロフ

わが友たちへ

往復

Depayser(他動詞)：一、国、境遇、環境をかえること。二、習慣を変えることにより困惑させたり、とまどわせたり、

方角を見失わせたりすること。

Le Petit Larousse

長い間私は、はっとして目覚めることが続いた。細部は異なるが、大筋その夢は大体同じものであった。いつの間にか私はパリでなく、故郷の町ソフィアにいる。何らかの用事でソフィアに戻り、旧友たちや両親に再会し、また自分の部屋を見る喜びを噛み締めていた。それからパリへ帰る出発の時刻が来る。すると情況が瓦解し始めるのである。既にして私は駅へ向かう路面電車の中にいる（駅で乗り込むのはオリエント急行、数年前ソフィアから私を運び去り、二日後四月の寒々しい朝、パリのリヨン駅のプラットフォームに私を抛り出した列車である）。そのとき私はポケットの中に切符がないことに気付く。きつと家に置き忘れたのだ。しかし取りに帰れば列車に乗りそこなう。あるいは、路面電車が何だか分からない人だかりのために突然停止する。乗客が降りるので私も降りる。私は重いスーツケースを手にして人の群れを掻き分けるが一向に進まない。密集した群集は冷淡で、入り込めないのである。あるいはまた、路面電車が駅に着き、私は駅の入り口に向かって突進する。と言うのは、遅れていたからなのだ。ところが、入り口を通り抜けるやその駅がセットでしかないことを発見するのである。裏側にはコンコースも、旅行者も、レールも列車もない。ないのである。私は、見渡す限り風にあたむ黄色くなつた草の生い茂る原っぱを前にして、ぼつねんと立ち尽くしていた。あるいはまた、私は友人の運転する車で家を出発した。彼は近道を決め込んだ。われわれは急いでいたからだ。しかし、彼は道に迷つてしまい、道路は狭まつてゆき、徐々に人の気がなくなり、最後は茫漠とした地平に到る。

パリへ戻れなくなる私の夢には、常に新たなヴァリエーションが生じ続けたが、最後の結末はいつも同じであった。まったく偶発的な理由によってパリへの帰還の不可能なことが明らかになるのである。以後私はソフィアで生活しなければならぬのだ。夢とはいえその時の不安は大変なものであったから、私は胸の鼓動を高鳴らせて目覚めるのであった。私は薄暗がりの中で目を見開き、パリの私の部屋の佇まいを少しづつ確認し、傍らに眠る妻の肩に触れて、無上の喜びに浸りながら現実自身をゆだねるのであった。夢だったのだ！私は目を覚まし、自分の生活・私の本当の生活を再確認するのであった。数週間か数ヶ月後、次の悪夢の訪れまで私はその激しい夜の恐怖を忘れる。その後私は、この夢が、いずれにせよ東ヨーロッパから移住した多くの亡命者に共通するものであることを知った。

不可能な帰還の夢は間遠くなり、本当に私がブルガリアに里帰りした後消滅してしまった。それは一九八一年、私がパリに来て丁度一八年目のことだ。その夢が現実にならぬようにするため、私はそれなりの備えを怠らなかつた。まず、個人旅行の危険を冒すことを避けることにした。つまり、ブルガリア建国千三百年祭祝賀のための学術会議から招請される形で手はずを整えた。したがって、これはまったく公的な催しであり、私はフランス代表団の一員になったのだ。出発は自分の友人たち、特にマスメディアに関係し得る人々には予め知らせておいた。万一私のフランスへの帰国が妨害された場合、彼らは私の解放を要求する委員会を組織してくれる筈であった！最後に究極の備えとして、旅立つ数日前私は一緒に暮らしていた女性と結婚した。それは怪しげな内縁関係でなく、法律上の配偶者であり、まさかの場合助けに来てくれると思っただの……。取り急ぎ申し上げておくが、このような危惧は杞憂に終った。この旅行中私はいくつかの異常な事態に驚かされること

もあった。それは事実であるが、私は飛行機に乗りそこなうこともなければ、身分証明書を失うこともなく予定の期日に恙なく帰国した。この滞在はしかしながら、自分のアイデンティティーの意味を明らかにしてくれた。ここで披露しておきたいのはそのことである。

自宅訪問

これから申し上げるのは、長期にわたる不在の後祖国に戻った一人の亡命者の体験である（はつきりさせておくと、私は《状況的な》亡命者であって、政治的亡命でも経済的亡命でもない。私は高等教育を終えるにあたり、《研究を仕上げるための》一年間留学という全く合法的な形でフランスにやって来た。そしてその一時的滞りが決定的滞在になったのである）。度重なる偶然がこの体験をとりわけ密度の濃いものにした。その例外的状況の中で生体反応を観察するため、幾人かの人々が奥深い洞窟の底に降り立った。それは正常な機能をよくよく知悉することを可能にするものであった。殊更そうしようとしたわけではないが、一九八一年五月のあの十日間私は尋常ならざる体験の被験体となっていた。その体験は地下一、八〇〇メートルへの下降ではなく、一八年前に離れた場所への帰還である。

この状況とは、したがって不在の継続時間と、過去何年間かの中断の全体的な性格（パリにはブルガリア人の共同体はなかった。あるいは当時私は興味がなかったのでそれを知らなかった。ソフィアとパリの間に情報の循環は殆どなかった。鉄のカーテンのせいである。この二つの場所の不連続性は現実的に、例えばパリとサンフランシスコよりも大きかった）であり、結局は厳密な意味合いでの場所のアイデンティティーである。ソ

フィア滞在中、私は幼少期と青少年期を過ごした同じ家で両親と一緒に過ごした。そういうわけで、自分への関心を喚起する努力をすることなく、ここに私の印象を書き写してみたい。

故国に帰還した亡命者は訪問外国人とは似ても似つかぬものである——その人の亡命が始まった時、彼の身分が外国人であった人間とも異なる。一九六三年フランスにやって来たとき、私はそれがまったく分からなかった。私はフランス社会の只中の一外国人であり、まことに遅々とした段階を踏みながら、フランス社会に馴染んでいった。フランス社会との接触において、私は急激な飛躍ではなく、アウトサイダーからインサイダーへの立場の微妙な移行を体験した（アウトとイン、外側と内側、言うまでもなくそれは常に相対的な形で設定される）。ある時私は自分がおもや外国人でない、いずれにせよ以前と同じ意味の外国人ではない事実を認めざるを得なくなった。私の第二言語は時を経て、すんなりと軋轢なしに第一言語の位置に定着していた。ところが、亡命者の帰国の際に生じたのは、まったく逆の現象であった。即刻、自分が異なる二つの文化と二つの社会に対する内側の視点を持つ自分に気づくのである。私にとってすべてが直ちに身近なものとなるためにはソフィアに降り立つだけで充分であった。予めの適応過程は不要であった。私はフランス語同様ブルガリア語にも不自由しなかった。私は同時に二文化に所属しているような気がした。

羨ましい立場といえるだろうか？自分の体験を解釈するに躊躇があるとすれば、一つの事実が確かなもの、疑いを許容しないものとして立ち現れるからである。その事実とは、私にとっての漠とした不快感と心理的抑圧の日々である。軽々に頭に浮かぶ解釈を排除するためとりあえず付言しておく、私だから話す不快感の原因は、言葉の狭い意味で、政治的なものではないように思われた。すなわち、フランスとブルガリアの体

制の違いに関係することではなかった。その体制の基本原理に対する私の内的反感は二〇年来変化していない。そして、昔と同じで私の行動は闘士のそれではない。私がここに言及する存在のむずかしさは違うレベルに位置するものである。

ソフィアに発つ前、招待された大会用の発表原稿の準備をしていた時から、その不快感の予感があった。会議のテーマは《ブルガリア》であり、私は一つの問題に取り組んでいた。ナシヨナリズムの価値観の問題である。私の主張は（若干簡略化して言えば）人間が所属するグループを擁護することは集団的エゴイズムに他ならない、というものであった。つまり外部からの影響は腐敗の源泉であるところか、文化の発展に不可欠かつ有益なものであるとか、過去を蘇らせようとするよりもむしろ、あらゆる手段で現在を生きるほうが良いというものであった。要するに伝統的な国家主義的価値観の崇拜の中に閉じこもることは余り意義がないということである。

私は躊躇いなくそう書いた。困難が生じたのは、元々借用語のフランス語で書いた発表原稿を母国語のブルガリア語に翻訳し始めたときのことだ。それは語彙とか構文の問題とは全く関係のないことで、言語を交換することによって、私は想像上のメッセージの受け手を換えてしまっていることに気づいたのだ。私のスピーチを聴くことになるブルガリア知識人たちは、私が期待するようには内容を理解することができないことが、その時あきらかになったのである。国家主義的価値に対する無遠慮な発言は、別のより大きな国の勢力範囲にある小国（自分の国）に住んでいるか、あるいはより強力な隣国からの脅威から庇護されている——庇護されていると信じている——第三国の外国で暮らしているかによって、同じ意味を保ちえないのである。確かにパリ

はナシヨナリズム的価値観を楽観的に放棄できる恵まれた場所であるが、ソフィアは全くそうではなかった。忘れてならないのは（というのは、爾來事態は大きく変化しているからなのだが）、当時は民族主義的な言説のみが共産主義のイデオロギーに対して唯一可能な公的反対を表すものであった事実である。ブルガリアのナシヨナリズムの価値観を称賛することは、すべての関係者にとって、公的なスローガンに痛烈な打撃を与えることを意味した。政府は愛国的な忠誠表明には反対したくないので、こうした反共産主義的な動きを許容せざるを得なかったのである。

多少なりとも、この問題はいかなる発表者、いかなる作家にとっても身近な問題である。人は自らの演説の聴衆や、推定される読者に応じて自身の言説を変更するものである。しかし、想定される聴衆が私に示唆した変更はそれ以上であった。つまり、一つの主張を逆の主張にきっぱりと変えなければならなかったのである。私はブルガリア知識人の立場を知っていた。万一私が彼らの立場にいたならば、恐らく私もそれを共有していたであろう。しかしながら、私はもはや同じ立場にいない。私の住まいはパリであつてソフィアではない。（だから？）私は逆を考えたのである。ただ、そのことを彼らにどのように言えばよいのか？私は恰も現在のフランス人としての人格しか持たぬ人間であるかのように振る舞い、私には察しがつく彼らの反応を考慮せずに意見表明をすべきであろうか？それでは私がブルガリア文化の内情を知っていることを否定することになる。ソフィアを一度も離れたことがないかのように話すのはどうか？そうなると私の過去一八年間を消し去るに等しいことになる。二つの立場を統合して中立的な方途を探すというのはどうか？Aと非-Aを不都合なしに統合することはできない。私には沈黙に頼ることのみが残された……。

この漠たる不快感はソフィアの友人たちと話しをする時、別の形で現れた。例えばある人が自分の生活状況について不満を洩らす。パリで同じような話題を聞くと、私は相手にあらゆる種類の提言をすることが出来る。その提言は多少とも説得力のあるものであるが、必然的に共有する生活基盤に基づくものである。こうした事実ゆえに、彼もしくは彼女は彼女の言を聴き容れてくれるのである。ソフィアでは同じようには行かなかった。私が話し相手の《立場に立とう》とする、したがって自分のブルガリア人としての人格に立とうとするあまり、彼の問題に対して《ブルガリアに》特有の解決法を提示してしまうのである。その時私は彼が不信を懐きながら私の話を聴いているのを感じた。非難を含むような彼の沈黙は《問題がそんなに簡単であるなら、君はなぜこの地に止まってその手立てを試してみないのか?》と言っているようであった（もしくは彼の声が時折そう語っていた）。

こうした状況のなかで、とにかく私は言い返すことが出来なかった。《あー僕は、ご存知のように、君の問題は……。僕は月曜日にはパリ行きの飛行機に乗るので!》しかしそれは本当だった。私は彼の問題に解答を見出せなかったから、あるいは、彼の冷笑から逃げたかったから、そのように言いたい欲求が湧き起こったのだろう。いや、むしろ自分の気持ちを言い表すことが出来なかったのである。それは、そうすることが単に無作法になるからという理由だけでなく、自分の意思表明をすることは、私のフランス人としての意見のみを、つまり単にソフィアを訪れた滞在者としての意見を表明することになってしまふと思ったからであった。果たして二つの立場を統合することは可能であったか? フランス人であると同時にブルガリア人であろうとしても、私はパリあるいはソフィアのいずれかにしか存在し得ない。つまり、異なる二つの場所に同時に存在すること

は私の能力の及ばぬことである……。私の話の内容は、それが話される場所に強力に依存していたので、私が此方にいるかあちらにいるかはどうでもよい、という訳にはゆかなかつたのである。私の二重の帰属は一つの結論を得た。私自身の見解では、二重帰属によって二つの言説の各々は本物らしくない趣を付与された。それは私の話のそれぞれが自分の存在の半分にしか対応し得ないからであつた。私はまたもや息苦しい沈黙の中に閉じこもつてしまつた。

二重帰属

また別の会話の折、フランスでの生活に関する質問に対して答えながら、ブルガリアの生活と似ていることや、称賛に値しないようなこと（多くの場合これら二つは合致した。官僚主義、特権的気質、閥族主義……）に関して嬉々として喋っていることに私は気が付いた。そのかわり、自慢していいようなすべてのことは、喉の奥に引っかかるのであつた。前者の場合、私は自分の中のブルガリア人としての人格と同じようにフランス人としての人格に近づき易い位置を占めていたが、後者の場合はフランス人だけが喋っている風であつた。また、自分がブルガリア人であるだけに、友人たちの立場にわが身を置くことになりがちで、その境界が重く感じられるのであつた。二重言語はさらに余計に不可能であることが明らかになつた。そして自分が二つの半分に分裂し、その各々はどちらも非現実的な半分となつていることに気が付いた。

私が遭つた旧友たちはきつと私を喜ばせたいと思ひ、また誠実さ故にこう言つた。《君は全く変わつてない！昔のままだね！》。とはいえ、想像上の聴衆が私に示唆した変化はそれ以上に大きかつた。それは過去の一八年

を否認することであり、その一八年が存在しなかったかのように、また私が第二の人格を獲得しなかったかのようにしてしまふものであった。母は下駄箱に私の靴を一足保管しており、庭仕事ができるようにと、それを出してくれた。私はそれを履いた。まごうことなく私の靴だった。同じ部分が変形し、私の足に完璧にぴったりであった。みんなが私を認め、受け入れ、過去一八年間中断していた会話がまた始まった。あらゆることが、あの年月は全然存在しなかった、それは幻想であり、いま目覚めたばかりの夢であったと思わせる方向に寄せた。すんでのところで私は仕事を与えられ、仕事に就き、結婚しそうな気分になっていた……。

私の方はなるうことなら、逆に皆が、私が見違えるほどに変わり、その変化に驚いてくれるほうがよかった。そして、フランスの文化参事官に電話した時、私は本当にはっとした気持ちになった。フランス語が喋れた！夢ではない！さらに、その参事官は私の名前を識っており、私がほどなく帰国することも知っていた。私のフランス人としての存在は幻想ではなかったのだ！会話の話題はぱっとしないものであった（予算を増額せず、いかにしてフランスの書物をブルガリアの図書館に収めうるか）が、私はわれわれのやりとりの共犯関係に熱いものを感じていた。皆が私の存在を確かなものにしてくれたのだ。もしも陳述の場が無くなれば、もう喋ることはできない。私が喋らない、ということとは私が存在しないことである。

空間（外地）は消失に脅かされ、時間の方はこんなに長く感じられたことはなかった。その十日間は殆ど一八年間に匹敵した。私は一晩に数年づつ年を取っているような気がした。パリでの体験の代わりに、各々の会話と邂逅が、ソフィアで暮らしていたらどのような体験になったかを想像させた。というかむしろ、それを知らないも拘わらず、ソフィアでの生活を思い起こさせたのである。私は一人の外国人のように、あるいは、外

部から来たがゆえにその人にすべてを説明しなければならない遠方からの来訪者のように、来歴を知らなかった訳ではない。そうではなかった。私はその来歴を暗黙裡の承認事項として、暗示的にまた想像力によって内部から受容していた。私が離れたブルガリアに直ちに、全面的に再度沈潜することのような可能性は、隣接する過去を、したがって私のフランス人としてのアイデンティティーを嘘にすることになる。こうした二つの半分を以って一つの全体を成すことは不可能であった。半分のいずれかであらねばならなかった。その時の支配的印象は両立不可能性であった。私の二言語と二言説はある意味で非常によく似ていた。どちらか一方で私の経験の全体をなすに充分であり、明らかに一方が他方に従属するというものではなかった。一方はこちらで君臨し、他方はあちらで君臨した。しかし各々は絶対的に君臨した。それらは似通っており、その結果相互に交換可能であった。が、統合は不可能であった。あの執拗な支配的印象はここに由来する。つまり、私の人生の一方は夢であらねばならないのだ。ソフィアで私に夢として現われたのはフランスでの生活であり、目覚めた時に味わう後戻りの不可能を感じるのである。次の新たな出会いの時は、頻繁に思わず言うことであろう。また亡霊が出た！あるいは、平然と私が亡霊だ。それがよければ幽霊だ、と。

こうした経緯が私にヘンリー・ジェイムズの小説『楽しい片隅』^①を思い起こさせた。その作中で主人公は三年間の不在の後生まれ故郷へ戻ってくる。彼は定住者には生起しえない一つの疑問に直面する。それは、自分が我が家に居たらどうなっていたか、如何なるものになり得たか、ということであった。小説の主人公は空き家のなかで『本当の』亡霊・アルター・エゴつまり場所に居ついた自分の分身に出くわすに至るのである……。パリに帰って私が最も心の混乱を感じたのはまさしくまどろみから抜け出る時であった。いずれの世界

に入るべきかが分からなくなるのである。母が手紙をくれ、《お前は本当にここに来たのだろうか？それともあはれは夢でしかなかったのだろうか？》と書いていた。夢であれ錯乱であれ、おそらく私はあちらと此方で生活したと主張するしかないのだ。

私の二言語は各々が一つの全体であった。その事実がまさしく二言語を統合しがたいものにし、新たな全体を形成することを阻んでいた。その訪問以前、ブルガリアに関する知識がフランスでの生活を居心地悪いものにするには一切なかった。パリでの母国語の使用は極めて明確な三つか四つの状況に充てられていた。パリで知り合った数少ないブルガリア人との会話の終わりの二言三言、非常に間をおいた読書、九九の表、そして二三の罵り言葉などである。以上がフランスで私がブルガリア語を使用するほぼすべての状況である。母語は明らかに借用語の下部に位置していた。

しかしながら、私は逆の状況を想像することもできた。ブルガリアに住んで、フランス語の翻訳家になったり、あるいは外国からの訪問者に語りかけたり、フランス史の専門家になったりするのである。とは言え、それは十日間の訪問の折に私が体験したことではない。私はフランス人としての人格の寸分たりとも放棄することとはなかったし、同時に私は、これもまた完全な形でブルガリア人としての人格を失うことなく、取り戻していた。それは単なる一個の存在には荷の勝ち過ちすぎることであった！二つの人生の一方は他方を排除せざるを得ないのである。このような感覚を避けるため、ソフィアで私は孤独な肉体労働に進んで逃げ込んだ。庭で草刈をし、樹木を刈り込み、土を運んだ。それは、あまり良く知らない人の家で居心地の悪さを感じるときのように、言葉を交わす必要なしにグループ交流に参加するのが気楽なので、台所への食器運びを申し出たりす

るのに似ていた。

出奔以来一八年のこの帰郷の教訓が徐々に重くのしかかった。二声の共存は精神分裂病に通じる脅威となった。この時二声は競合するのである。ただし、もしもその二声が、原則的に自由な選択の序列を成していたら、分裂の苦しみを乗り越えることが出来る。が、如何なる序列もなかった。ソフィアの出版社から、フランス文学の批評選集の序文を書く依頼があった。私は躊躇い、言い逃れた。フランスではその序文を書く役割を果たしたばかりであったのに。理由は明白だった。その時点の私の言説の序列が逆になっていたからである。私はブルガリア語の声（外国人の声！）をフランス語の枠組みでは統合しうるのだが、逆は出来なかったのである。現在の私のアイデンティティーの場はバリであり、ソフィアではなかったのだ。

国替えを余儀なくされること、国を換えること

すべての分裂と分割が不幸というわけではない。ご承知の如くその点については意見の分かれるところである。この件についてマルローは、一つの信じるに足る見解に言及している。《アラビアの》ロレンス大佐の意見である。ロレンスは自らの経験から《現実には二つの文化に所属すると、人は誰しも魂を失う》と言った。現代という《アイデンティティー硬直》の時代、宗教的であれ文化的であれ、民族的自省の時代にあつて、この発言は新たな一つの今日性を提示しているようだ。尤も、本源的な形で——大地と死者への賛辞、根無し草に対する非難——この事柄はドレフュス事件の時代にフランスの言論を主導したものであるが。反対意見もまた今日よく耳にするところである。多くの人々、特に芸術家や知識人は文化の多様性や声の混淆、のみならず序列

も等級もない過度の多声を称賛する。彼らは中心からはずれた人間に適合した環境、一般化した放浪生活でないにしても、コスモポリタニズム（世界主義）の中に自分達の姿を認めていた。私は公平な判断でこの問題を議論することは出来ない。と言うのは、私の個人的宿命が否応なく私の見方を屈折させるからである。しかし、私は自分の体験の意味を明確にすることは出来る。

フランス滞在の初めの頃、私は――後になって気付いたのだが――最大限の同化を追及していた。嘗ての同国人を避けて、ひたすらフランス語だけを話した。目を閉じたままで様々なフランスのワインやチーズを識別することが出来たし、フランス女性としか恋愛をしなかった……。こうしたことは何らかの激動も引き起こすことなく、際限なく続いたことだろう。この行動の果てには、ブルガリア人が一人減ってフランス人が一人増えることになったであろう。損失も利益もなく、人類にとっては差引残高はゼロとなったことであろう。

心配かつ遺憾に思わざるを得ないのは、伝統文化の喪失そのもの、生まれ育った国の文化の剥奪である。しかしそれは新しい文化を徐々に獲得する異文化の受容によって償われることであり、すべての人に可能なことである。われわれが幾つかの遺伝的特徴からは決して解放され得ないのは事実である。怪しげな手術がなければ、私は性転換できないし、人種（目に見える肉体的な特徴の意味で）や体の個人的形態を変えることも出来ない。しかしながら、伝統や文化、あるいは言語のような生後に獲得された特徴をこれらと同一視しなければならぬであろうか？先祖伝来の文化への閉じ籠もりを個人に強いることは、いずれにせよ文化が不易であることを前提とするものであり、それは経験上誤りである。あらゆる変化が良きものとは言えないとしても、生き物である文化はすべて変化する（ラテン語は進化が出来なくなつてから死語となった）。人間はまた別の文化

を獲得しさえすれば、自分を育んだ文化を失うことで悲劇を味わうようなことはない。人間らしさの成分は言語を持つことであって、特定の言語を持つことではないのである。

しかしながら、私の同化への憧れは、母国語のアクセントを失くす努力を全然しなかったことから考えて、さほど全面的なものではなかった。初めてのブルガリア帰国の直前、この還元不可能な違いの徴候が強固なものになった。なぜであろうか？理由の一つは恐らく私のフランスへの同化の成功そのものにあった。私は帰化したフランス市民となり、最も公的な機関・国立学術研究センターで働き、すべてのフランス人の子弟と同じように学校に通う子供も一人いた。もう一つの理由は幾分逆説的だが、私の仕事の進展に由来するものであった。私は究めようとする対象と自分という主体のはざ間に、より明確な関係——自然科学の場合と違って人文科学の領域に関連性のある関係を築く必要性を感じていた。文学その他の言説に関する自分の書きものの中で、自らの心情を吐露することなく、他の人々の著書の読解のみとは異なるものによってその仕事を育てる必要性を感じていた。つまり、私の個人的直感、いわば自分の経験によって。そうなると、伝記的事実を無視することとは出来ない。私はフランスにおける一人のブルガリア人という移住者であった。

私は明白な事実には屈服するしかなかった。恐らく他の人々のように完全にフランス人になることはできない。その上、ブルガリア旅行の直前に結婚した妻は、私と同じで、フランスの外国人だった。私の今日の状態は、したがって伝統文化の喪失にも、更には異文化の受容にさえ相当せず、むしろ異文化横断と言えるものと呼応している。つまり、それほど昔のものが失われぬままに新たな規範を獲得する状態である。爾後私は、外部であると同時に内部であるような特異な空間で生きている。《自分の家（ソフィアの）では》外国人、《外国（パ

リ)では《わが家》。

私は二文化共存体験の特異性を誇張しているわけではない。まず、私はこうした体験を初めて味わった人間ではない。文化や芸術の分野の多くの人々がパリあるいはロンドン、ニューヨークあるいはトロントのような大都市に惹き付けられ、その数は増加の一方である。その上、文化的アイデンティティーには民族主義的なもののみならず、年齢集団、性集団、職業集団、社会的な階層集団などと関連したその他のアイデンティティーもある。だから現在、程度の差こそあれ、われわれは皆自分の内部で既に、いろいろな文化の出会いを体験しているのである。われわれは皆文化的雑種なのだ。民族文化への帰属はあらゆる文化帰属の中で単純に最も強力なものである。家族やコミュニティーを通じて、言語と宗教を通じて、肉体と精神に残された痕跡が、民族文化の中で結びついているからである。では、かつて苦悩の中で体験された民族文化への帰属が、何ゆえ快感をもって体験されるのか？

文化間移動を受け入れるためには、まず異文化の受容を受け入れなければならない。一つの文化から有益な形で身を解き放つためには、異文化を我が物にし、それを《語ること》から始めなければならない。フランスに來た最初の頃、私は慎みがないと思われることを気にすることなく、同化の努力をしたのを思い起こすことができる。というのは、民族文化には個人的になんらのメリットもないからなのだ。つまり、それは一方で私の慣れ親しんだ環境に起因するものであって、高等教育を受け、外国語を学ぶべく導いてくれたが、また他方では、私の故国を支配し、多くの同国人が逃亡するように仕向けた政治体制のせいであった。もしも私の出国が望んだものでなく強制的なものであったら、また職業的能力としての共通言語を持たぬままフランスに來て

いたら、きつと基本的な同化に成功するのに大いに難渋したことであろう。あらゆる意味で、基本的同化は最小限必要である。

文化間接触の第一段階は恙無く進行したと認めることにしよう。そのとき、文化間移動は何に役立つのだろうか？それは、言葉のあらゆる意味で、「異郷に身を置くこと」に役立つのである。

自分の居た環境・境遇・国から無理やり引き離されて異郷に身を置いた人間は初め苦痛を覚えるものだ。元の仲間内で暮らすほうが心地よいからである。しかしながら彼はその体験を生かすことが出来る。その人は理想と現実、自然と文化を最早混同しないことを学ぶのである。昨今の人々が人間的でなくなったのは、彼らがわれわれと違った行動をするからではない。時として彼はホスト国の人間への軽蔑や敵意から生まれる怨念のなかに閉じこもる。だが、それを乗り越えれば彼は知識欲を見出し寛容を学ぶ。《現地人》の中の彼の存在が今度は、環境を変えたことによる効果を發揮するのである。彼は、現地人の習慣を乱したり、自分の行動や判断で戸惑わせたりすることによって、彼らのうちの幾人かが、それまで当たり前と考えていたことから外れた、同じ超脱の道に入り込むのを手助けすることが出来るのである。

この本自体は、異郷に身を置くことの地理学的な意味と同時に、異郷に身を置いた者の眼差しをも述べるものである。

ソフィアからパリへの移動は、今になって気付いたことだが、相対的なものと同時に絶対的なものを私に教えてくれた。相対的なものは、私の故国のようにあらゆることが至る所で行われるわけではない、ということとを無視しえなくなったということ。とは言え、絶対的なものもあった。それは、私の中で育った全体主

義の体制は、如何なる状況にあつても、私にとつて悪の基準として役立つということである。倫理的判断の実践において、『あらゆるものは等価である』とする相対主義と、黒白を明確にする単純な善悪論の、これら二兄弟に対する私の同時的反感は、恐らくここに由来する。

私が語っている内的対話は際限無く再区分されることはないであろう。私は組織的な放浪生活の美德、文化的な借り物の無限の集積体の美德を信じることは出来ない。ある文化の中でくつろぎを感じるためには、長年の修行が必要である。人間の生活の持続時間には限りがあるのだから、このような体験を二つも三つも重ねる余裕はない。三〇年前からブルガリアとフランスのほかに、三番目の国アメリカが加わった。しかしながら、私はまだ、その国をよく知っているとは思わない。友情の絆や、そこに在住する多くの人々と私を結ぶ親密な友好関係があり、ほぼ毎年訪問しているにも拘わらず、その国は私にとって何よりも先ず、仕事をしに行く場所であると認めなければならない。具体的に言うと、講演をしたり、文学部の講義——フランス文学、英文学あるいは比較文学——をしたりするのである。したがって、私のアメリカ観は非常に限定的なものである。いわば、そこでは大学人としか接触がない。私自身大学都市、あるいは大学の構内に住まいする。アメリカ世界のその他の部分は、対話者の話題や新聞記事、またテレビの映像を通して、屈折した形で受容するのである。かくして、三つの国を移動する人間として、私は各々の国と夫々かなり異なる関係を保つことになる。ブルガリアは私が生まれ育った国であり、今日私に残されたものは、個人的な思い出を除けば、全体主義体制と向き合った個人の——基本的な——体験である。フランスは私が生活する国であり、私にとって掛け替えのない市民であると感じている国である。アメリカ合衆国は、仕事をするために赴く所、同郷人というより同僚と出

会う場所である。私にとって、これら三つの国に共通する唯一のこと（他にも幾つかの国があるが）、それは、そこで私は友人を見出し、向き合っているにせよ不在であるにせよ、未だに彼らと共に生き続けているということである。これから認めるページは彼らに向けられたもの、ゆえに彼らに捧げられるものである。

第一部 ブルガリアの出身

第一章 全体主義の体験

全体主義は哲学的あるいは政治的、経済的あるいは社会学的な様々な観点から検討され得るし、またそのように為されてきた。私としてはそうした視点の一つを選ぶのではなく、全体主義国家における人々の意識の内部に身を置いて、その体制の下で暮らした人たちが体制をどのように見ていたかというイメージについて言及したい。私の位置する平面は共通体験のそれである。それは政治との関係における人間の集団心理に係わる。これを明確に行うために、私は自分の体験と、他の人々が私に打ち明けてくれた体験に根拠を置きたい。ブルガリアを脱した後、私は様々な作家が全体主義について語らざるを得なかった著述に目を通したのは事実である。したがって、私の過去を語り理解するやり方に、そのことが影響することは充分考えられる。

構成要素の特徴

この体制の三大特徴は、分析を試みようとする誰の目にも容易に提示される。(一) この体制はイデオロギーに依存する。(二) 民衆の行動を方向づけるために恐怖政治を利用する。(三) 生活上の一般原則は、個人的な私欲の擁護と権力意志の無制限な支配である。夫々の特徴は他のものに還元され得ないので、これらの特徴を個々に検討することが不可欠であると思われる。全体主義はこうした特徴の総体に呼応するものであり、私に關しては共産主義であるが、他では国家社会主義であることもあり、ただ一つのイデオロギーのみに対応するのではない。

さて、これらの特徴を明確にするため幾つかの用語を検討することにしよう。

(一) イデオロギー。その理想主義的な内容と社会の目標として提示された地上における完璧な社会像は、はるか昔の影響を取り込んだものである。キリスト教の千年王国説やルネサンスの理想郷主義、より近いところでは初期社会主義の思想家の影響などである。しかし、それは共産主義運動の創始者カール・マルクスの名前と結びつけるのが妥当であろう。経済学的にも社会学的にも、教義の主要成分が認められるのはマルクスにいてである。

全体主義の社会で暮らす人々はイデオロギーの重要性を信じなくなる。すべては根拠のない言葉・目くらまし・見せ掛けでしかなく、現実の生活とは何ら関係のない嘘に思われてくるのだ。《偉い人達》は現実の悲惨な状況を忘れさせようとしてわれわれに輝かしい未来について語り、人民の権利を口にするが、それは彼ら自身の富と権利に対する個人的欲望を隠すためでしかない。われわれにわずかな記憶さえあれば、唯一不変の真実

として提示されているにもかかわらず、イデオロギーの内容や大原則は絶えず大きく変化していることが分かる。一九三〇年代末期のソ連とヒトラー・ドイツの関係、六〇年代ソ連と毛沢東・中国との関係が、特に外交政策において目立った実例を示している。

しかしながら、偉大なるスローガンの虚偽や共産党の紋切り型言辞との日々の対決は、イデオロギーの本当の役割を隠してしまう恐れがあるのである。まず、例えば経済生活の大部分がそうであるように、多くの分野は原則から外れた諸原則（実際は現実的原則との妥協である）に支配されている。生産手段や農業の共同体、重工業に許される優位性などはそこから生まれる（経済の恒常的に破局的な結果を物語るのは、勿論そうした事実である）。経済を支配しているのは効率への配慮というよりむしろ大原則なのである。もっと大切なのは、内容がどうであれ、そうしたイデオロギーに言及することは儀式的行為として欠かせないということだ。全体主義の国々は恐らく一人の人間もしくは一つの階級の権力に支配されている。しかし、——そしてこれが重要なのだが——このような権力は決してあるがままの形で明らかにされることはない。そのようなことになれば消滅する恐れがあるからだ。イデオロギーの指示は空っぽの貝殻のようなものである。が、貝殻がなければ国家を持たないのである。

(二) 恐怖政治。恐怖政治が、日常的に国を運営する手段、人民の行動を支配者が望むように強いる手段となり得ることを誰が発見したのであるうか。共産主義の理想に対する答えほどには明らかでない。ある程度までは、ホップスが死の恐怖を人間の基本的かつ主要な情念であると看做すことによって、その土壌を均したと言える（その事実を知った僭主が、その上に自らの権威を打ち建てる誘惑に駆られた）。既にしてフランス革命が国家

的恐怖政治の形態を実践している。一九世紀六〇年代のロシアの革命家トカチエフ、ネチャイエフらは恐怖政治の組織的運用を企てている。エルネスト・ルナン^②はその著『哲学的対話』において、この全体主義国家の特徴に大いに言及している。無神論の社会に絶対権力を確立するには、神話的な地獄の焰で従わざるものを脅迫するだけでは不十分であつて、『現実の地獄』を設置しなければならない、と彼は考えた。それが反抗する者の意志を挫き、他のすべての人々を脅えさせる強制収容所なのである。彼はまた特別警察設置の必要性も思いつく。道徳的良心のためらいを欠く人間、時の権力に全面的に献身的な人間、『どんな残酷な行為も平気でなし得る、従順な機械のごとき人間達』からなる警察である。その後二〇世紀初頭にはジョルジュ・ソレルとかいう人が暴力の正当性を考察することになる。

とはいえ、このような考えを組織的に運用・実践した功績は、初期全体主義国家の創始者レーニンとボルシエヴィキの仲間に帰属する。次のような単純な行動原則を明確に述べたのは彼らである。民衆全体を威嚇すること（トロツキー『革命は戦争として指導されるべきである』。『個々に何人かを殺すことによつて、何千もの人間を脅えさせることができる』）。こうした恐怖政治の職務は、当初チエカ^③と称する特別な組織に委ねられた。それは特別な委員会であつた（ジェルジンスキー『われわれの組織は至るところに支部を持つ。人民はそれを恐怖する』）。恐怖政治の存続は『階級闘争』『プロレタリアート独裁』などの戦闘的で内容空疎な美辞麗句で正当化された。

敵は恐怖政治の重要な正当化に資する。全体主義国家は敵なしには存続できない。敵がいなければ、それをでつち上げるのだ。一旦敵と看做されたら、その人たちは何らの同情にも値しない。ソヴェイト文学最高峰の

古典作家マクシム・ゴルキーは次のような粗暴なスローガンの作者である。《万一敵が降伏を拒むなら、これを殲滅しなければならない。》この任務を容易にするためとして、敵を非人間的に扱うことから始められる。敵に付される通常の呼び名は《害虫》もしくは《寄生虫》であった（ナチスはユダヤ人や政敵に対して同様の扱いをした。彼らは更に《特別な》という形容詞のぞっとするような同種の用法をも考えだした。それが特別司令部や特別行動などである。かくして警察官や収容所の看守はこう言い放った。《われわれ共産党員は敵を殺すことを誇りに思う。》更に《敵が一人減れば祖国のパンが一つ増えるのだ》。敵であるということは、不治の病・遺伝的な欠陥であった。収容所の経験者は常に新たな再契約の優先権をもつのである。敵の階級つまり《ブルジョワジー》（あるいは《富農》のような農民のヴァリエーション）の子弟もまた敵である。敵としての身分は、仮令それを他者に譲り渡すことが出来ても、失われることはない。敵の身分は伝染する。敵の友人（あるいは婚約者、あるいは夫）もまた敵となるのである。

ナチスのイデオロギーは共産主義のそれとは非常に異なったものである。恐怖政治の機関はあちこちに存在した。往々にしてユダヤ人は、彼らは何をしたかによってではなく、彼らは何ものであるかによって迫害された事実が力説される。つまりユダヤ人であることによってである。しかしながら共産主義の権力の場合、事情が異なるわけではない。それは階級としてのブルジョワジーの弾圧（危機的な場合は除去）を強要する。単にその階級に所属しているだけで充分なのだ。それが如何なることであれ、何をしたかは不要なことなのである。そして、ブルジョワジーの子弟は不名誉の烙印を押されたままになる。ゲシュタポは間違いなくシユタージ⁴以上に粗暴で残酷だった。が、シユタージは量で埋め合わせをした。東ドイツでは一千万人の労働人口に対して、

常備の警察官がおよそ十万人、臨時の警察官が二十万人、また約百万人の臨時の協力者が計上された。

恐怖政治、それは死もしくは弾圧の脅迫であつて根柢のない言辞ではない。ひとたび設置されるや、それは社会を根底から変えてしまふ。如何なる社会であれ、人は他者の仕合わせを素直に喜ばないものなのである。全く逆に、他の人々を喜ばすのは人の不幸である。これはドイツ語でシャーデンフロイデと言われるもので、モンテーニュはフランス語で《他人が苦しむのを見ることによる邪悪な喜び》と言つた。全体主義の社会では、他者を苦しめる手段——恐怖政治——は、誰でもが勝手に使うことが出来た。それどころか、この手段に訴えることは奨励され、称賛さえされたのである。私の身近な人間（上司、部下、ライヴァル、隣人、兄弟）を不幸に沈めようと思えば、適切な方法で共産党あるいは国家公安委員会の機関に通報しさえすればよい（これらの機関は相互に通底していた）。訴えられた人は即刻昇進がなくなり、仕事を奪われ、住居を追い出され、地方に飛ばされ、強制収容所に抑留され、恐らくは殺される！《何らかの理由で誰かを破滅に追い込もうと思えば、誰でもそうすることが出来た》と、かつてブルガリアの収容所にいた受刑者は証言している。万人が自由に駆使できる究極の罪悪、以上が全体主義の組織の変革であつた。

(三) 私欲の支配。この国の住民にとって、生活は公的スローガンの中に条文化された原則に沿つて展開されていないのは明らかである。まったく別の規則に則つたものだ。それは、お菓子の一番美味しいところを奪い取る無慈悲な闘争なのである。こうした社会の日常生活を支配しているのは、私欲に基づく冷笑的な態度と権力意志である。ひとたびイデオロギーという目隠しが剥がされると、白日に晒されるのもまたそうしたものである。こうした特徴は全体主義体制にのみ固有なことではない。しかしながら、ここではそれが未知なる権力へ

の到達手段なのである。以上の事実を考慮に入れなければ、この体制は理解しがたい。

私欲の絶対的な支配はマルクスの思想や、ましてやレーニンの政治を反映したものではない。むしろ、私欲の無制限な支配が定着したのはスターリンが権力を握ってからである。東欧に存在した形の全体主義はソヴィエト国家の第二段階のものに類似している（世界のこの地域ではあらゆるリズムが加速され、そこでの一九四八年はロシアの一九三四年に呼応する。《人民民主主義》が樹立した時には、既にスターリンが権力の座にあつた）。よく知られているように、スターリンは忽ちすべての旧ボルシェヴィキ親衛隊を粛清した。それは、未だに思想を信じるすべての人々であつた。典型的な共産主義者とは、もはや狂信的な人間ではなくて出世主義者なのである。彼は注文に応じて容易に信条を変えることができるのであり、熱望するのは出世と個人の権力であつて、遠い未来の共産主義の勝利などではない。

マルクス、レーニン、スターリンは搖籃期の全体主義国家をじっくり見守り、主要な力を与えた三人の妖精である。

こうしたシニカルで利己主義的な生活様式の設置は、この全体主義社会の三番目の原則が公的には認められないにしても、その系譜を打ち立てるのがさほど難しくない、人間と社会の概念に相応するものである。ここでわれわれは、一八世紀フランスの唯物論者を思い浮かべることができる。例えば人間の行動の唯一の動機を私欲に見たエルヴェシウスである。ニーチェが《あらゆる固体は全宇宙の支配者となつて、自分の力（権力意志）を拡張し、その伸展を邪魔するものすべてを排撃することを熱望している》と説明するとき、彼の心理的洞察もまた、それほど遠いものではない。われわれはそこに、全体主義社会における様々な権力の動因が委ね

られた、目に見えぬ、あるいは明白な、闘争についてのかなり正確な叙述を見出すことが出来る。ソヴィエト世界の若干の識者らは夙に、スターリンはマルクス以上にニーチェに賛同した行動をしていた事実を指摘している。

秘められた魅力

普通の人が社会の階梯を上ろうとすれば、どのように振舞えばいいか？既に権力の座にある人々の命令に従ったり、完全な服従と熱意ある勤勉な態度を見せることによって、入党を試みることであろう。成功すれば、その人は数々の（僅かな）物質的恩恵に与れる。とりわけ彼は象徴的特権を手に入れて、他の人達に対して自分の権力を増大させることが出来る。彼は彼らの昇進を早めたり遅らせたり、更に彼らの生活の全面的展開の決定権を持つことになる。党のヒエラルキーの上席に昇れば、新たな特典を得る足掛かりになる。専用の保養所、高級マンション、自動車、専門店、外国旅行など。党政府の頂上に登りつめれば何百万人もの人間の生活に影響力を及ぼすことができる。その代わり入党に失敗しても、彼には密告と中傷の手段が相変わらず残されている。かくして、彼は少なくとも偶には権力を享受することができる。

今日全体主義が招く衆目の一致する非難は、その理解の障害となっている。西欧デモクラシーの住民は、全体主義は普通の人間の憧れとは無縁のものと思いたがる。ところで、そのようなものであったら、全体主義はかくも長くは維持されなかつたし、あれほど多くの人間を航跡に巻き込むこともなかつただろう。それは逆に恐るべき効率の仕組みなのである。共産主義イデオロギーはより良い社会のイメージを提示し、それに憧れる

ようわれわれを鼓吹する。理想の名において世界を変革する欲望は人間的アイデンティティーの欠くべからざる部分ではなからうか？同時にその社会には適者生存の法則が君臨していて、権力の享受は人間の条件の最高の真実として保証され、《生》の価値観もまた確認されている。言い換えれば、イデオロギーと社会は相互扶助の関係にあつて、個人は他方で蒙つたあらゆる失望感を、もう一方で埋め合わせるのである。

また、共産主義社会は個人から彼の責任を奪う。決定するのは常に《彼ら》である。ところで責任は、往々にして担うに重い荷物である。時としてわれわれは皆密かに、決定する苦勞を親に任せて子供に帰りたくなることはないだろうか？囚人の幸福感と自由の身になつた者の苦惱は、気まぐれな作り話ではない。非常に多くの人がわれ知らず感じる全体主義組織に対する魅力は、ある意味で自由の恐怖、責任の恐怖に由来する——以上が、あらゆる専制的体制の人氣を物語っている（これはエーリッヒ・フロムの『自由の恐怖』にある主張である）。既にラ・ボエシ⁽⁵⁾は『自発的隷従』のあることを説いている。ソヴィエトの人間とは、当局の發言を機械的にわが意見とする人であり、それによつて彼は安心する。しかし、他の誰しもこの誘惑を完全には無視し得ない。民主主義と比較すれば、全体主義は異論の余地なく悪であると認めつつも、ソヴィエト連邦に貼り付けられた『悪の帝国』というレッテルに、何かしらの困惑が感じられるのはその所為である。この悪の帝国という表現は、それが善の安樂な権化たる『われわれ』とは全く無縁であるかのように、悪を一つの場所、一つの体制に特定してしまうのである。悪は悪魔の中に閉じ込められないのと同様、どんな帝国であれ、その独占的な特性ではない。

集団と個人

全体主義社会は、擬一観念論的専制である。これら三つのタームの各々が、その社会に必要な成分を表している。擬・観念論・専制の相互作用の結果が、民衆の面然と異なる集団の分類である。中枢機関（党、国家、警察、軍隊）のあらゆるメンバーが頂上を占める。特権階級いわゆるノーメンクラトゥーラである。その対極には、個人的不正行為や集団の所屬を考慮して決められた、明白なものもあればそうでないものもあるが、敵が位置する。最後にその中間が大多数者であり、全員に共通の不都合に《ただただ》堪える人間の塊である。

共産主義のイデオロギーは社会に階級は無いと明言する。それは部分的には正しい。というのは、問題の集団は一九世紀の資本主義国家特有の階級よりは、伝統的社会的カーストに類似しているからである。グループ間の主要な相違は経済的な身分規定ではない。国家はほぼ唯一の雇用者であり、この観点から見れば全員が同じ困難に直面している。カーストの場合と同様、その相違は言葉の広義的意味合いで、なにより政治的なものである。相違は多くの権利と特権の分配によって生じる。

平等の原則は、それを要求する国々では絶えず痛烈に打ち破られてきた。われわれが特権政治に屈服する生活の全領域を思い描くことは難しい。例えば、若者の教育については、全員が大学に行く権利や、好みの学校に入る権利を持つわけではない。また住居については、一連の政治・社会的判断基準に従ってアパートが割り当てられる（住宅難は恒常的である）。食料・必需品の補給については、中央委員会メンバー用の店は政治執行部局員の店と混同されることはない。ましてや、残り四分の三の住民に割り当てられた、うらぶれた空っぽの店との混同など論外である。交通の場合、若干の道路は全員使用できるが、その他は歴史々専用である。外国

旅行については、幾人かの人はその権利を有するが、あとの人は兄弟国にしか行けない。ある人達は外国の通貨を手にし得るが、他の人達は出来ない。

この新しいカーストには伝統的カーストに共通する特徴がある。双方を特徴づけるのは細部にわたる複雑な序列化である。というのは単に三大階級があるだけではない。各階級は更に非常に細かい幾つかの階級に再区分される。党のメンバーであるだけでは、さしたる余得はない。次には中央委員会に、そして政治部局（補充メンバーと正式なメンバー、書記と書記代理）へ昇進しなければならぬ。警察官の身分では、まことにささやかな権力しか保証されない。政治警察のメンバーは羨むに足る地位である。ブルガリアの場合、それは国家公安委員と呼ばれ、そこに所属すると法外な権力が授与された。それだけでは不十分で、暫くすると弾圧の正真正銘の特権階級として公安委員会のメンバーを監視する任務を持つ第三番目の警察UBOが設置された……。他方、伝統的カーストの場合と同様、階級帰属は世襲的であった。特権階級の子弟は自動的に特権階級となり、同族結婚によってカーストの身分制は永久に続くのである。こうした社会では、権力の譲渡が自然に王政の原理へ進展するのはそのためである。チャウセスクの妻、ブレジネフの女婿、キム・イルソンの息子、ジヴコフの娘らが国家元首を襲うべく指定されるのは当然のことなのである。

とは言え、昔のカーストと新たなカーストの差異を明確にし、逆に階級に近づける要素がある。それはカーストの変更可能性である。こうした移行は簡単ではないが存在する。一方で、階級が格下げになる者もある。多くの古参ゲリラ隊員やレジスタンスの英雄のケースがそうである。彼らは《誠実》であり続けたために、先ずは特権を失い、一般大衆と変わらぬ人になり、幾つかのケースでは《敵》になって抑留の憂き目に遭うこと

もある。何よりも人々は、ある階級から次の階級への上昇を熱望することが出来る。敵の身分から比較的安定したグループへの移行、あるいは一般大衆から、より野心的なノーメンクラトゥラのグループへの移行などが望める。こうした理由で、全体主義社会は民主主義社会同様、そして伝統文化とは逆で、個人の野望を掻き立てる競争世界である。最底辺から立ち上がり至高の権力階層に到達し得る。そのためには、ゲームの規則をしっかり把握しさえすればいい。

出世の重要な手段は簡単である。上司への盲目的追従と密告である。密告は個人的あるいは一時的な悪癖に止まらない。それは全体主義社会の構造的なファクターである。権力にとって密告は、なにもものもその支配から逃れることの出来ぬ担保である。司直の数は職務遂行に十分ではない。住民全体を監視しなければならぬので、住民は彼ら自身互いに監視し合わねばならないのである。個人にとって、それは権力の階梯を昇る手段である。隣人の悪口を言うことはライヴァルを排除すること（他人の運命を決定づけること）によって得られる直接的な満足感と言うまでもない）である。

密告が単なる誹謗中傷であるとか、真実を幾分含んでいるとかは重要でない（それは難しい問題ではない。誰しも全面的にこの体制に満足していないのだから非難できないのだ）。大切なのは自分の周りの人々に害を与えることなのだ。密告が提起する唯一の問題は、それは誰もが駆使しうるので、自分も標的になりかねないということである。そこで、難儀の折に助けてくれる相互扶助と連帯の派閥が拡がってゆくのである。

奴隷根性について言えば、それはすべての上司と対応する際に必要な決まりである。共産主義国家では、《個人崇拜》は空から降ってくるものでもなければ、偶然生まれてくるものでもない。作家や知識人が特に甘言を

弄した魅惑的な存在をでっち上げるのである。そういうわけで国家元首は大体において彼らと親密な関係にある。より低い身分のチーフも同じようにする。積極的なおべっか使いは、常に確実に優遇措置を獲得する——但しここでもまた、派閥と個人のライヴアル関係による制限はあるが。全体主義社会における、倫理生活の全般的荒廃と冷笑的な態度の広がりの説明するものは、奴隷根性と一般化した密告の使用である。

この社会に特徴的な特質の共通点を挙げるとすれば、個人の自律と尊厳に対する反対であろう。民主主義では、個人が自分自身の決定に従って、つまり自分の意志によって行動するとき、人は自律した人間として行動する気持ちを持ち、その結果誇りある人間であると感じる。多くの場合彼は錯覚しているかも知れず、あるいは本当は自分の無意識の力や、自分を超えた経済・社会的なファクターに動かされているかも知れないが、それは重要ではない。誇りの感情は、彼が自分の行動で作りに出した表現の結果なのだ。そして彼の人間性そのものが《No》と言う可能性と共に始まるのである。自律は無制限の権力意志と混じり合うことはない。それは主体の自由を要求するが、他者への服従や、他者の排除は要求しない。ところが全体主義社会（このタームはこの場合まことにびったりだが）におけるすべては、個人の自律を、また個人が自分の行動の源となる可能性を妨げる方向に狙いを定めている。最大の美德にして最高に報われる美德は従順である。最も許されない原則は不服従である。

その教義は、はなから個人を犠牲にしてグループを優遇することを明示している。また人々からあらゆる経済的な自律を奪うことによって個人を苦境に追い込む手段を手に行っている。その結果が私有財産に対する非難攻撃、生産手段の国営化、農地の共有化である。また別のレベルでは、幼少時から（小学校や学外教育機関を

通して）子弟に思想教育を施す配慮をしたり、管理し難い自律の温床である家族の連帯に反対して中央政府に服従を促したりすることになる。同様の意図で、《敵》の妻たち（ある場合は彼女らの夫）には離婚が強硬に勧告される。個人の選択は国家の選択に従わざるを得ない。恐怖政治は違った風に考える人々すべてに襲いかかる。最悪の欠陥の一つはユーモア感覚——権威に対する距離の象徴、つまり自律の象徴——を保持することであり、政治的な逸話を語ることである。したがって全体主義にとつて狂信家などどうでもいいのである。彼らは中央政府の決定のみに従わねばならないのに、ある時敢えて自分の思想に基づいて行動するかも知れない。その代わり、度重なる裏切りを体験した《指導者たち》は彼らの真価（彼らにとつて好ましい）を発揮するのである。

しかしながら、自律の拒否は伝統社会への回帰を全く意味しない。ご存知のように実際、伝統的な社会は、哲学者風に言うなら、《他律》の支配によつて特徴づけられる。規則は深遠なる時間の彼方や先祖伝来の智慧といった、よそから来る。そこでは個人の自律は脆弱な立場しか持たない。全体主義の社会は広い意味で現代性を帯びている。この社会主義的世界は、もはや不易の与件ではなく、むしろ意図的な投企の結果と見られている。ここでは、人間は運命のおもちゃではなく、運命の主と看做されているのである。伝統的な社会の正当性の源は過去である。全体主義社会のそれは未来なのだ。それ以外にはあり得ない。こうした観点からルイ・デュモンが気づいたように、全体主義は《擬——全体論》であり、仮面舞踏会である。つまり伝統の力によつてではなく、自発的に伝統社会の形態を纏うことを選んだ現代社会である。民主主義との相違は、単に意志主義的態度の有無にあるのではなくて、社会的プロジェクトに対して個人が占める立場にある。こちらでは自由な、

あちらでは規制されたプロジェクトの。

二重性

権力の圧力に直面すると個人的主体は二重人格の戦略を採用する。それは本質的に、二つの言説を交互に使い分けることからなる。一つは公的に使う言説、他方は私的なそれである。公の言説はテレビ、ラジオ、新聞などが流し、政治集会などで耳にする正にそのものであり、あらゆるオフィシャルな場面で使用しなければならない言説だ。自宅や友人同士、あるいはスポーツや釣りのように、イデオロギーが余り関与しない領域では私的な言説を使用する。

二つの言説はバイリンガルの二つの言語が持つ適性に非常によく似た適性によって特徴付けられるが、その語彙により、少しは構文により、特に機能原理によって相互に区分される。私的な言説は幾つかの要求に支配されている。例えば対話者の喜びの追求、あるいはわれわれが完全な真実と称するもの、出来るだけ正確に世界を描写したり、主体の意見を説明したりしなければならぬ言葉の表明など。公的な言説は一致の《真実》しか気に留めない。われわれが話し相手の不確定な喜びについてあれこれ考えないと同様、言葉は経験に基づく現実に直面していない。唯一の要求は、既存の、また周知の他の言説に合致していること、すべてについて一つの正しい意見と一致していることである。

こうした二重性も全体主義社会に特有の一現象である。オーウェルは *doublethink* 二重思考の名で別の変異形を不朽のものにした。『一九八四年』のなかで、共産党はその名を付した意識操作の技術を導入した、と語って

いる。独裁形態に固有の理由から、党はしばしば矛盾する主張を表明する。同時に党は、党の完璧で不変な一貫性を明言する。この二つの言語の活動行為は、どうすれば折り合いがつかぬのであろうか？それこそ正に二重思考の技法によるのである。オーウェルによると、それは、《知ることと知らないこと、注意深く構成された嘘が語られても、完璧な事実であるとする意識を持つ、互いに排除し合う二つの意見を同時に受け入れる、それが矛盾することを知りつつも信じる、論理にたいして論理を採用する、必要な場合でもモラルを放棄する》こと等からなる。不思議なことだが、関連して想起されるのはベルトルト・ブレヒトの次のような叙述である。彼は全体主義体制を賛美する詩人であり、敵対者でもない。

《共産主義のために闘う者は「闘うことと、闘わぬこと」「真実を言うことと、言わぬこと」「約束を守ることと、守らないこと」「危険に身を晒すことと、危険を避けること」「名を成すことと、目立たぬこと」が出来なければならぬ。》

要するに、この《技法は》無矛盾の法則なしで済ますことを可能にし、支離滅裂の支配する場に論理を見出すことを可能にするものである。相容れない与件を前にして——一方では矛盾する表明、他方では無矛盾の要求——、矛盾を受け入れるのではなく、それが党の政策に関係するとき、矛盾を矛盾として認めぬように理性を慣らすことによって党は後者への働きかけを選ぶのである。

さらに別の折り合いのつけ方が容易に心に浮かぶ。ここ数十年の共産主義体制内で行われてきたように、離反もまた二重性の特徴を持つ。同じような折り合いの付け難い与件や、行動の一貫性の無さと思想の一貫性などの前に立たされると、離反者は逆の選択をするのである。彼らは思想の完全性を保持し、住む世界の矛盾を

告発するのである。離反の時代のかなり前、ロシアの偉大な思想家ミハイル・バフチンがこの件に言及し、幾つか究極的結論を予見した事実注目するのは興味深いことである。当時バフチン（もしくは彼の友人と名義人）は公的イデオロギーに自らを順応させようと思っていた（彼の強制収容所送りと自らの《二重性》はしかしながら、間近に迫っていた）。《内的対話》と称する様々なるものを書きながら、彼はある意味で病理学的形式を特定するに至る。それは内部の声がもはや安定した、慣れ親しんだ思想的選択と呼応しない形式だった。《極度に好ましくない社会状況における、人格と彼を育む思想環境の分離は結局、意識の全面的崩壊につながる。狂気か、精神錯乱に》。

ところで、声の複数性は精神分裂を招くとは言えるであろう（このタームに人格分裂や精神的混乱に共通する意味を認め、苦悩の形式に連合を認めるならば）。二重思考もまた一種の狂気である。なぜなら一貫性のないさ、つまり矛盾を受け入れる決心をするのだから。それは党が、思想の支離滅裂が世界の支離滅裂と調和するように、すべての人への接種を望むワクチンのようなものなのだ。オーウェルや離反者にとって、狂気——彼らが党の政策の結果に見る——は、内的・質的な基準（結局は矛盾の受諾）によって確認される。一方党側は、純粹に外的・量的な基準を用いて離反者の狂気を確認する（というのは、実際に党は彼らを精神病院に監禁したからである）。彼らはすべての人がそのようにすると看做されているようには考えない。だから彼らは狂人ではない。反体制は反規範であり、異常なことなのだ。

党によって押し付けられる二重性は、個人に終生、唯一つの言説のみを要求する。しかし言説は内部に矛盾を抱えている。他方、離反者はいかなる状況にあっても一つの同じ言説を用いるが、それはそれ自体無矛盾の

規則に従うものであり、矛盾と世界の支離滅裂を告発する言説である。他方、私が前に言及した、またこれら二つの極端な態度よりも一般的な二重性は、概して相互に矛盾し合いながらも、各々が使用される情況に適合する二つの言説を意のままにするものである。党は唯一一致の《真実》を要求し、離反者は唯一整合性の真実を奉じる。自らに英雄とか殉教者の魂を感じることはないが、体制を容認しない大部分の住民は、一種の社会的な分裂症のなかに逃避する（それはもはや個人的な分裂症ではない）。個人的には全員が悪について語ることに同意しており、他を無視して自分の流儀を押し通そうとしている。ソフィアで暮らしていた頃、私や友人を含め、われわれはそうのように行動していたのである。

ここに叙述することは、重箱の隅をつつくような印象を与えるかも知れないが、それでもまだ類型的情況にすぎない。事実上、物事はもっと複雑である。私は範囲をかなり限定した実体として一方に党を、他方に離反者を措定した。この対比は原理原則のレベルで明確な境界であって、人間に関わる問題については疑わしい境界である。というのは当然のことながら、党のメンバーもまた公的な言説と私的な言説を使い分けるからである。党の官吏（ジョージ・オーウエルが《内部の党》と称するもののメンバー）にとつてさえ、それは真実である。言説間の境界域はここかしこで一致しない。党大会の演壇で声高に叫ばれる言葉と、仕事場の仲間内で交わされる言葉の差異は大きい。どちらも公の場であるのだが。その上、公私の境界はまことに不安定である。ある時、公的言説は映画、書物、歴史的な事実の解釈にまで及ぶが、それ以上には及ばない。またある時、それは人間関係にまで及ぶ。

われわれが私的な言説に不可欠であると思う整合性の真実は、往々にして他方では、その時の真実以前の、

あるいは真実と無関係の別の適合の真実でしかないことが明らかになる。

したがってこのような対比は確かに明瞭性に欠ける。私はそれを証言することが出来る。われわれはそのことを強く感じていた。

私がある人と出合った時、双方に同質の言説が生じたり、あるいは逆に、全く異なる言説が対立したりすることは稀である。実際には言説に序列があつて、それはまた別のよく似ているが同一でない序列に連接しているのである。驚くべきことは、ある言説から他の言説への移行、言葉の使用域の選択は、そうした技法は学校で教えられてもいないし、名称さえも無いのに、すべての人に完全に制御されていた事実である。公的であり私的であり、言説それ自体を越えて、われわれ各々はあれこれの個別的主題に立ち入らせるための、公的なものと私的なものの割合、順応主義と明晰性の割合を決定する調整的な言行為を有していたことが想像される。

これら言葉の様々な使用域をわれわれは皆、時宜に応じて、ある時はこの回路、またある時は別の回路を接続して巧みに操ることが出来たのである（共産主義即位後に成長した私の世代とそれ以降の世代の者は、われわれの年長者よりもこの操作が楽であつた。乳離れの直後から、われわれはこの能力を吸収していたような気がする）。しかしながら、誰しも喪失感と、したがって有罪感を免れていたわけではない。真夜中一人きりのとき、常に警戒していなければならない適合への配慮によって引き起こされるあらゆる被害と、自分に責任を感じる自傷にわれわれは気付く。通りに出て、あらん限りの声で真実を、単なる真実を——狂人のように叫んでみたい欲求が、心の内に湧き上がるのを感じるのである。でもそれが出来ないことも、われわれは知っていた。全体主義の国々の人間とそれ以外の国々の人間の違いはそこにある。全体主義以外の国の人間も、公私の断層

や、完全な真実と適合の真実の断層によって、言説の中に導入される分裂を知らないわけではない。が、彼が何をしようとも、過失と罪過から免れ得ないという気持ちには、全体主義以外の国の人には理解できない。

逆に言えば、それが全体主義の活力を確かなものにしてきているのだ。集団的に二重性を実践することにより、体制の大部分の人々は、罪禍を免れたものと思っている。彼らが本当の生活（私的領域）であると看做すものなかで、彼らはそれを免れている。実際、全体主義は各人が自らを慰撫するこの方法に甘んじている。それによって各人が望むところに自由裁量の余地が残されているのである。ヴァクラフ・アヴェル⁶流に言うならば、《虚偽の中の生活》を受け入れることによって、個人は虚偽の共犯者になる。それが社会の《自動的全体主義》である。したがって皆が考えたがるように、たとえ個人が《善》であるとしても、体制のみが《悪》というのは本当ではない。われわれ全員が汚染されているのである。

全体主義社会において、やましいところのない人などいるだろうか？ いるとしても生きてはいないであろう。アヴェルの指摘するように、全体主義的独裁の特性は、伝統的独裁と異なり、大多数を虐げる少数派はいないが、個人は生活の様々な側面から抑圧のメカニズムに捉えられていることにある。すべての人が少なくとも幾分かは、抑圧の主体であり客体であって、死刑執行人であると同時に被害者であった。《各々すべてが共に牢獄の囚人であり番人である》。公私の境界は、中央委員会のメンバーも含めて、各々すべての人の内側に入り込む。私の存在のある部分で、私はこの体制に耐え、また苦しむ。別の部分によって、私はそれを動かしている。以上が、全体主義が個人に課す生の悲劇的条件である。

第二章 強制収容所

私は一九六三年までブルガリアで暮らした。当時の私の世界に、強制収容所は何らの位置も占めてはいなかった。しかしながら、そこに閉じ込められた人達は私と同じ地域に住んでいたのである。私は同じ《罪》で罪ある者であった。同じ服を身に着け、同じ音楽を聴き、同じ笑い話をし、そして警察に対して同じ感情を養っていた。彼らの世界は、そのタブー、術策、魅力的なあるいは傲慢な人物などによって完全になじみのあるものであった。しかし私は強制収容所についてはなにも知らなかった。私はすでに大人になっていた。自分を取り巻く事実を前にして、見て見ぬ振りをしようとか、耳を塞ごうという気持ちはなかった。それでも事実はこちらにあった。恐怖はすぐ傍にあった。私はそのことを知らず、それが止むための何の努力もしなかった。それは単に偶然のせいではなかったと理解している。

私は他の人々が感じていた《不安》から——ある程度——庇護された、比較的恵まれた環境にいた。今日、私は自分を責めようとは思わない。特に自分を咎めるべきことは何もない、ということも分かっている。但しその過去のせい、これから語ることは私に係わりがない、とは決して思えないことも分かっている。

これから強制収容所についてお話しすることは、受刑後随分経って、かつての受刑者達の舌がほぐれた後で私が聞き知ったことである。⁽⁷⁾

強制収容所の機能

強制収容所は二重の意味で全体主義体制を象徴するものである。まず、それは全体主義体制の最も重要な部分である。というのは、それはルナンが語った、あの《現実の地獄》を具体化したものであり、死そのもの以上に恐怖政治の基盤として役立つがゆえに全体主義体制の重要部品であると同時に、国全体が緩和された体制の収容所として組織されるという意味で、精髓の凝縮体でもある。強制収容所など考えられない社会は、もはや全体主義の形容詞が付される資格がない。人口・領土ともにフランスのほぼ五分の一であるブルガリアに、一九四四年から一九六二年の間、約一〇〇に上る強制収容所があった。拘留された人の数を算出するのは難しいが、恐らく十万人に近いと思われる。

勿論、いかなる社会も法律に違反する者を監禁する場所を所有している。しかし、ここで重大な問題は、監禁が司法によるものか、あるいは行政府の決定によるものかを知ること、また監禁が牢獄送りに至るものか、収容所送りとなるものであるかを知ることにある。東側陣営の国々ではナチスドイツ同様、強制収容所に追いやるのは行政府（警察）である。司法は受刑者を刑務所に送り込む。この違いは決定的である。それは一九五〇年代スターリンの強制収容所に反対するキャンペーンを始めた、かつてビュッヘンヴァルトの被収容者であったダヴィッド・ルッセによって当然のこととして明らかにされた。強制収容所の受刑者は決して有罪宣告を受けた人ではなくて、単に警察の決定によるものであった。特殊な法律がこの専断を許していた。このような状況の明確な理由は明らかである。収容所の目的は罪人を罰すること（罪人は裁かれて投獄される）ではなく、無実の人を処罰して住民を恐怖に陥れることなのである。受刑者は刑務所に行く。強制収容所に入ってい

るのは受刑者ではあり得ない人々である。(実際ソヴィエトにおいては、徒刑囚の数が多すぎて、どの監獄も収容しきれぬほどだった。したがって彼らは亜北極の収容所に住まうことになる。)

しかしながら、共產主義の裁判は往々にして裁判のパロディーでしかない。今日われわれは一九三〇年代の有名なスターリン裁判がどのように仕組まれたかを知っている。それは四〇年代五〇年代の東欧での裁判のモデルになった。数多の監獄では拷問、それどころか暗殺が横行した生活条件は何ら望ましいものではなかった。それでも、拷問、暗殺を経験した人たちは郷愁めいた気持ちで監獄を語り、強制収容所からの脱出に成功した稀な人たちが時として、獄内という安全圏で暮らすため些細な罪を犯すこともあったのは事実である。法的手続が純粋な形式行為にされるのは無駄なことだが、ないよりはましである。起訴には証拠が要る。時に弁護は取って証拠の空しさを明らかにしようとする。法律がいかに極悪なものであっても、法は官憲と法に従う人間の双方を対峙させる。牢獄がいかに恐ろしいものであっても、牢獄には遵守すべき規則がある。牢獄はそれによつて個人の必要最低限の尊厳を守るのである。

強制収容所はまずもつて、受刑者にはるかに厳格な管理法規を押し付ける。懲役が問題となるからである。とはいえ、最悪なのはそれではない。せめて彼らが懲役刑を宣告されたいのだが。彼らは何ら刑の宣告を受けたい。彼らの状況の要点は、正に彼らがその犠牲者となつてゐる恣意性のなかにある。と言うのは、裁判がないからである。彼らには収容所の入獄期間が分からない。六ヶ月？一〇年？あるいは死が訪れるまで？彼らは何ら法的罰則を課されていないので、獄内管理法規がどうなつてゐるのか知ることが出来ない。彼らは單純にその意図が測り知れない、しかしながら確実に無慈悲な刑罰執行人の手の内に委ねられている。

各収容所は独自の抑圧形態を重要視した。ピユッヘンヴァルトでは飢え、コリマでは寒さと疲労であった。ブルガリアの強制収容所の特性——特にあらゆるものの中でも最悪のものはロヴェッチ（一九五九—一九六二）——は、最も原始的な形の拷問であったようだ。棍棒による殴打である。貴方の解放あるいは生活条件の改善したがってまことに短い人生は、それがいかに不条理なものであっても何ら規則に依存してはいない。そのすべてが貴方を憎むように仕向け、貴方を軽蔑し、貴方が苦しむのを見ることにのみ満足を覚え、棍棒を持って貴方の前に立つ人間の気分次第なのである。このように個人の気まぐれな意志に依存すること（たとえこの気まぐれが全体的政策によるものであったとしても）は、最も過酷な規則に従うこと以上に悪いことである。

収監者のプロフィール

正確には誰が強制収容所に送り込まれるのであろうか？この質問への公的回答は簡単である。つまり敵である。真の敵は刑を言い渡され、投獄され（もしくは銃殺され）、更に数も多くないから、明らかにこの回答には注釈が必要と思われる。われわれがもはや公的資料を調べるのでなく、本物の受刑者に尋ねれば、本当の意味が徐々に分かってくる。全体主義国家は敵を必要とする。しかるに敵がない（敢えて国家と闘おうという人は稀である）。そこで、そうでないあらゆる種類の人間を敵として提示することに腐心する。事実を鮮明にするために敵を幾つかの大きなカテゴリーに編成してみよう。敵対者、非順応者、ライヴァルである。

敵対者とは、党国家の公式路線の主張と異なる政治的意見を表明する人達である。要するに彼らは真の《反体制派》である。東欧諸国では三つの反対の高まりを弁別することが出来る。第一の高まりは往々にして対独

協力に巻き込まれた、《旧体制》に含まれるあらゆる主要な人物への反対である。この反対は戦後すぐ消滅した。第二の反対の高まりは、一九四五年馬鹿正直に共産主義者と妥協し、一九四八年には除去された非共産主義的反ファシズム的政党への反対。第三番目は、チトーとの断絶からスターリンが死ぬまでの一九四九—一九五三年共産主義への反対の高まりである。最も頻繁な断層は《国民の利益の擁護か、あるいはソヴィエト連邦への忠誠か》のテーマを廻って起きた。

その都度、主要な人物たちは簡単に肅清された。彼らを取り巻くメンバー、その家族、彼らの協力者は強制収容所へと送られた。こうしたカテゴリーに入る人達に共通の特徴は、実際に公式路線との意見の違いを表明したことである。彼らは決して敵として振舞ったこともなく、新政府の存在を力で脅かすようなこともなかったのだが。それ自体の立場の必要性から、反対者を敵に仕立て上げるのは政府なのである。全体主義国家は如何なる意見の多数性も認めない。すべての不一致は制圧を招来する。

ずっと広汎な第二のカテゴリーは、強制収容所の住民の大部分を供給する。それは決して枯渇することがない(例えばブルガリアでは一九五〇年以降、反対を口にするとはもはや出来なかつたにも拘わらず)。このカテゴリーの構成員は正面切つて公式路線に反対することはないが、喜んで同意することもない。彼らはなんらかの分野である程度の自律を示し、住民の広範な層をなすものである。例えば、新たな協同組合に熱狂的に参加するのを嫌がったり、一頭しかいない牛や馬を手放すのを嫌がったりするすべての農民がこの層に入る。あるいは古い品物を売ったり、自分の責任で働いて、あくまで国家公務員になることなしに生活費を稼ぎたいと思う人たちもそうである。彼らは怠け者とか《闇市の不正取引人》というレッテルを貼られるかもしれない。

あるいはキリスト教の信者。あるいは同性愛者。あるいは、余りにも喧嘩騒ぎの好きな若者（《ならず者》のカテゴリは最も伸展性のある層の一つである）。

この《非順応主義》の幾つかのヴァリアントは特に注目値する。その内の一つは用語が文字通りに適用されるものである。たとえ政策と規範の関係が非常に不可解なものであっても、彼らの品行が認められている規範から外れた人達である。例えば衣服のモード。体の線をくつきり見せるズボンを偏愛する男子やミニスカートを穿く娘達は、一度か二度の警告の後、生きて帰れる見込みの不確かな強制収容所送りになる。ジャズやロックと少しでも関係ある音楽はすべて怪しまれる。なぜなら、それは西欧の、ゆえに敵のものであるからだ。タンゴより後に生まれたダンスもまたすべて怪しまれる。一人の証人——当時の映画監督——は一九六四年ツイストを踊った廉で逮捕され裁かれたと回想している。有罪の判決理由（彼は強制収容所は免れた）は、《われわれはモダンダンスに反対ではないが、二通りの踊り方がある。西欧流あるいは資本主義流、またわれわれの社会主義流である》とはつきり述べていた。夫婦以外のあらゆる性的関係は収容所送りをもたらす恐れがあった（風俗紊乱のため）。それに関連する情報はしたがって、恐喝の手段として組織的に利用された。

また別の抑圧の重要な根拠は《外国人との接触》である。旅行者、スポーツ関係者、ビジネスマンなど、仕事で滞在している外国人としばしば会うと必ず怪しまれる。なぜなら主体としての人間の自律を助長する恐れがあるからだ。したがって政府はスパイ罪の起訴状を提示する。西欧起源の品々に感嘆すること（帝国主義的テクノロジーの称賛に身を委ねる）もまた危険である。恐らくフランス語、イタリア語、英語のような言語を学んだり話したりするのはもつと危険である（スペイン語については、キューバで共産主義が勝利して以降怪

しまれない)。潜在的な裏切り者は本物の裏切り者同様監視しなければならないのである。同様に、《西欧の》作家の著書を好んで読むとマークされる。

言葉によるほんの些細な形の抗議であっても、強制収容所送りになる可能性がある。某氏がそうなった例を紹介する。パン屋の前の果てしない列に並んでいたその人はあえて不満を述べて《穀物はモスクワのもの、われわれには藁》と言った。また或る人は冗談で、《ほかほかのパン？選挙の直前じゃあるまいし！》と言ったために収容所へ。多くの人々は党和国家の首長や偉大なる同志に関する秘話を語ったために収容所に送られ監禁された。また別の人は、聴いたBBCのニュース（それは《国家に有害な噂を流す》ものと言われていた）を隣人の前で語ったために抑留された。最後にある人たちは、如何なる些細な違反も犯していないのに迫害を受けた。理由は、隷属性に欠ける、密告をしなかった、行進の最中や義務的な手仕事（労働者の班）の時に十分な熱意を見せなかった、などである。一人の女性の運命を決めた密告の内容は、《尊大な振る舞いで、人前で偉そうな顔をする。社会主義の新しいモラルに応じた環境を選ばない》というものであった。

被拘留者の最後のカテゴリー（数の上では余り多くない）は、邪魔者を追い払うためにその便利な手段を見出した彼らよりも高い地位にいる単なるライヴァルで構成されている。それは抑圧の仕組みを誰もが駆使することの結果である。ある離婚した女が宝籤に当たりマンションを買った。すると警察官である前夫は彼女を強制収容所に送り、住居を奪った。また別の女性は見知らぬ女と夫と一緒にいる現場を襲い、人前で大立ち回りをやらかした。すると公務員である夫は彼女を収容所に送ることで、狭量な妻を厄介払いしてしまった。あの男は村の共産党の書記官の言いよりから娘の名譽を守ろうとし、また別の男は積立金組合の地方責任者の欲

情から妻の名譽を守ろうとした。彼らはどちらも五年間の收容所送りになった。あなたの家が隣人の家を影で覆っていて、しかも隣人の兄は内務省で働いている。あなたは荷造りする暇も無く收容所へ発たなければならぬ。こうした実例が全体主義社会の基本的な特徴である。つまり、ライヴァル——あれやこれやの理由であなたの邪魔になる人間——を敵に変えてしまう容易さ。

その帰結は簡単である。万一未来の《敵》が、警告後急いで隷従的態度や密告を実践しなければ、逮捕され、男性なら殴られて、数ある《労働更正施設》（ブルガリア強制收容所の非正規名称）の一つに送られる。

日常生活

そこで送られている生活をどう叙述すればいいか？一九六二年、戦時中共産主義のレジスタンス運動家として自身が強制收容所に監禁されたことのある政治局員が調査委員会を率いてロヴェツチ收容所に来た。果たして数ヵ月にして生活水準が改善され、大部分の被収監者が解き放たれた。それにも拘わらず、彼の印象はとても強かったので、三〇年経た後も猶次のように述懐している。《ファシスト強制收容所の生活条件の方がうんと良かった。私は大きなショックを受けた……》

收容所は政治警察の吏員チームによって管理される。彼らは概して社会的に同じプロフィールを持つ。貧農家庭の出である。年若くして共産主義レジスタンスに身を投じた者達だ。戦後彼らは教育として党の、あるいはソ連の学校で訓練を受け、急速に昇進した。彼らは党にすべてを負っており、微塵の逡巡もなく献身的であった。彼らは思想に心を煩わせることはない。彼らにとっては幾つかの決まり文句が思想代わりであり、伝え

られた命令は献身的に実行する。思慮分別の問題そのものが彼らの精神をよぎることはない。かなり粗野で、そこそこに狡猾で、想像力や思いやりを一切見せることのない人達である。彼らの大部分（例外はある。中には辞職に追い込まれた者も若干ある）はサディズムの傾向を示している。彼らは完全に無責任の立場にあって、受刑者を虐待することによって昇進することさえ可能である。彼らは他人の運命を好きなように扱い、彼らに苦悩や死を押し付ける感覚に酔い痴れるのである。情況が異なれば彼らはサディズム的行動をとることはないであろう。偶々そこで権力の享受を味わうためにお手軽な手段を見出した普通の人間なのである。

職務において彼らは下役の警吏、特に《警吏の班長》に補佐されている。内訳は、普通犯あるいは迎合的な《政治犯》、仕事の責任者、ナチス収容所のカポ⑤に匹敵する者たちで、彼らは言葉の代わりに棍棒を使う。通常、殴ったり殺したりするのは彼らである。

ロヴェツチ強制収容所の被収容者の生活から取り出した幾つかの光景がある。朝の点呼の時警吏長（収容所における公安の責任者）はその日の犠牲者数人を選ぶ。彼は毎度のごとくポケットから小さな鏡を取り出し、彼らに渡して言う。《いいか、これが最後だ。自分の顔を見ておけ！》それから受刑者は袋を受け取る。その夜には自らの死体を運ぶのに役立つ袋だ。イエス・キリストが十字架を背負ってゴルゴダの丘を登ったように、彼らは自分で袋を運ばなければならない。彼らはそこでは採石場に向かって出発する。採石場で担当警吏達に死ぬまで叩かれて、袋に押し込められ、口は針金で閉じられるのである。夜、仲間が荷車の上に彼らを並べて収容所まで運んで戻る。遺体は二十体になるまで便所の裏にストックされる。トラックが空で運行することのないようにするためである。昼間の仕事のノルマを果たさなかった者は夜の点呼のときに弁別される。警吏の

責任者が棍棒の端で地面に輪を描き、輪の中に入るよう指示された者は毆打の嵐に見舞われる。

極めて過酷なこの体制の諸要素——超人的労働ノルマ、永続的な毆打、最悪の生活条件——はたった一つの目的しか持たない。受刑者のあらゆる内的反抗心を打ち砕くことである。服従しない者は死ぬことになる。あの者たちは従順なる沈黙に追い込まれる。自律の最も些細な痕跡さえ除去される。失われた尊厳の最後の砦であるのに。以下は、かつて収容所にいた受刑者が叙述した受刑者の一日である。《暗い朝まだき、許された休息から情け容赦なく引き離され、一日中朝の闇から夜の闇まで立ったままの労働、恒常的で間断ない緊張のなか、空腹と渇き、衰弱と肉体の消耗を感じながら、腰をおろしたり横になったりする可能性は皆無。同時に、受刑者が心中休息や慰めを求めぬようにするため、頭越しに看守の鞭音が唸り、罵りやひどい命令が飛び交い、あるいは耳元で煩わしい音楽ががなりたてる》(ゲオロギ・ジエツチェフ、『祖国の俘虜』)。

生存条件を良くする唯一の手段は官憲に協力することである。以前の見解を放棄する旨の声明書に正式に署名することをかつての敵対者に願ひ出るのである。密告者になり、また毆打する側に付こうとすれば、誰でもそうできた。そのようなことをした者は殆どいなかった。ヒロイズムからでも抵抗の精神からでもなく、一種のあきらめの気持ち故であった。その代わり、すべての人たちは恐怖を内面化し、抗議なしに屈服した。収容されている者たちは互いに語り合うことも殆どなかった。彼らにはそうする時間も力もなかったのだ。《かくも長い間、誰とも一言も交わすことがなかったから、私は話す習慣を失っていないことを確かめるため壁に向かって話しかけた、と彼らの一人は回想している。》彼らは不平を言わなかったが、自らの全面的屈服に何らの恥辱も感じてはいなかった。柳に雪折れなし。生き残るため、それ以外に方法はなかった。《ある受刑者は言った。

私は生き残るために沈黙した。息子のために。遅かれ早かれ奴隷状態は旧に回復される、しかし墓場からはな
んぴとも戻れない。》

こうした威嚇の効果は受刑者の家族や友人に及ぶ。当時、愚直なのか不実なのか分らないが、ある収容所の
責任者が指摘している。《殺された人間の近親者には必ず通知された。しかし、彼らが文句を言ったり、死因に
ついて尋ねたりしたことはまったくなかった。》恰も、皆が起こった事実が正当であると認めた証拠であるかの
ように。実際は、抑圧が余りにも凄まじいので、自分が次なる犠牲者となるのを恐れて、誰も文句を言う勇氣
がなかったのである。《兄死去の通知を言い渡されるために私は呼び出された。敢えてなぜかを問う勇氣はな
かった。兄と同じ目に遭いたくなかったから。》苦情の訴えは口頭によるもので、決して文書化されなかった、と
ある行政官は回想する。三〇年後かつての受刑者たちは、そのことを語るに常に言いよむ。《私には子供がい
ますので……。ほかの人に尋ねてください。》

周辺住民が被収容者に共感することはない。先ず、権力機関が彼らに貼り付けたラベルを素直に信用する方
がはるかに便利なのだ。かくして人々は不正に反発しなかったことで自分を咎めるようなことはなかった。更
には、いろんなところへ首を突っ込まないのがより安全なのである。ペスト患者から離れていれば感染する可
能性は低い。地方の責任者たちは、矯正し難い再犯者が問題なのだから、こうした金の掛からない労力を利用
しない手は無いであろうと考えた。収容所の側にある農夫は今日こう語る。《私は何も見ていない。何も聞
いていない。何も言えない。》このようなことが繰り返されても、情況は今日も明日も変わらない。

そのほかの住民への威嚇は勿論総合的プロジェクトの一部をなしている。強制収容所は秘密裏に管理されて

おり、直接携わる人間以外は誰にも正確にその内情を知ることとはできない。同時に、収容所の噂は広まらなければならぬ。収容所の名を聞いただけで人々が震え上がる必要がある。そうでなければ収容所は機能を果たしたことになる。われわれは次に、もはや収容所の道具としての役割でなく、国全体の凝縮されたイメージの役割を見てゆくことになる。国における収容所の観念は、棍棒で頭を殴ることが受刑者において恐怖政治の原理を喚起させることにある。誰も収容所から逃げ出せないのと同様、国全体は有刺鉄線で囲まれている。それを飛び越えようとする者は、見つければ撃たれる。

壁の崩壊後共産主義のプロパガンダは時としてこの問題を別な風に紹介しようとした。急拠実施した調査の結果、そのような収容所は党の指導により閉鎖された、とする事実を集めようとしたのである。これこそ正に収容所が共産主義政治の精髓であるどころか、政治の頹廢であった事実の証拠であろう。より近くから眺めると、こうした強制収容所の廃止は完全なものでないことに気付く。此方で一つが閉鎖され、あちらで二つ開設される。五月に受刑者を解放しながら、九月には彼らを再び収容したりする（一九八〇年代ブルガリアではそれとは逆の声明があったにも拘わらず、収容所は相変わらず存在した。トルコ系少数民族のメンバーが閉じ込められていた）。また、廃止は重要な取り消しを殆ど含んでいないことに気づく。収容所内で犯罪が起きても、司法的責任の追及は一切行われなかった。かつての彼らの責任者たちは罰せられるどころか、昇級し、勲章を与えられるのである。要するに——これが最も重要なのだが——より軽度な、しかしながら同じタイプの抑圧の処置は、共産主義専制の時代を通じてずっと住民全体に実施された。

例えば特に、嫌疑をかけられた個人については、特権の数限りない中断と権利の縮小が生まれた。どこそこ

に住み、どこそで働くこと、某所で治療してもらうこと、ある学科を学ぶこと、ある人たちと交際すること等がすべて出来なくなるのである。例えば、他にも、得体の知れぬ《ならず者》による肉体的攻撃、郵便物のチェック、電話の盗聴、ほのめかし、迫害等のあらゆる形の脅迫がある。また、収容所への監禁あるいは僻地への居住地指定。潜在的な敵（それほど有害ではない）と、往々にしてその家族を襲う純粋に管理する手段は更に問題である。またたく間に仕事がなくなり、住居がなくなり、自分の町に住めなくなり、遠い村に引越さなければならなくなる。その地で人々は土地を耕し、身分の低い地方行政官の命令におのきながら、ちよつと顔出しするため毎日警察署に赴くのである。

国全体の規模に見合った強制収容所は、恒常的に厳しい体制を敷くことは出来ない。しかし、住民がそのようなものが存在していて、その内部には、そこから戻ることが出来ぬかも知れないより小さな施設があることを忘れぬようにさせることは出来る。私がブルガリアの政治について話し始めるたびに、声をひそめ背後を見回すのをやめるのに、フランスに来てから数年を要した。教訓がもたらしたものである。

第三章 共産主義の終焉

全体主義の社会はまとまりのある全体を形成している。その真価は証明済みで持続力があり、その効果に議論の余地はない。人々は恐怖政治の前にたじろぎ、強制に屈する。ブルガリアのような国では初期の抑圧は非常に粗暴なものであったから、三〇年間一件の《反逆》もないほどであった。この社会には、見てきたように

隠れた魅力も有る。しかしながら、共産主義体制がヨーロッパの地図から消えるのに、一九八九—一九九一年の二年足らずで充分であった。どうしてこのような奇跡が生じたのか？この社会の秘密の欠陥は如何なるものであったのか——というのも、この帝国が崩壊したのは内部的理由のためで、共産主義陣営に対する外国からの働きかけによるものではないからである？（こうした働きかけは稀であったが、《スター・ウォーズ》⁹の脅威が影響無しとは言えなかったとはいえ、共産主義陣営は余り懸念しなかった。）最終的な崩壊は、組織のなかに亀裂があったことを示している。が、その亀裂の性格とは正確にはどのようなものであったのだろうか？

崩壊の理由

全体主義体制はある意味で構造的な緊張によって特徴づけられる。われわれは、不可欠であると同時に不要なイデオロギーの果たす曖昧な役割を見てきた。恐怖政治が効果的であるためには、絶対的であらねばならない。ところで、その必要な正当化を生み出すものはイデオロギーのみである。シニズムが絶対的信奉にあって代わる時、少なくとも絶対的信奉の外観だけでも維持しなければならない。そこで、彼らは儀式にしがみつこうとする。しかしながら、イデオロギー——誰も信じない全く儀礼的な単なる形式に墮した——は、壊滅状態に脅かされる。その結果イデオロギーは最早その役割を果たさない。恐怖政治のたがが緩み、離反が公然と広まりゆく。似たような矛盾は権力意志専用の役割にも巢食っている。権力意志は養われると同時に除去される。それは揺るぎない権威を持って君臨する。しかしながら、たとえ権力の頂点に登り詰めたとしても、いつでもそれを放棄する用意をしておかなければならない。その時人々は、野望の部分的放棄を含意し、しかし

ながらわれわれに安らぎを保証し、既得権を失わない自信を与えてくれる合法性の規則を守ることが、結局より有益なことであることに気付くのである。

われわれはまた、より一般的な方法で次のようなことを確認することができる。今日のヨーロッパで全体主義が死んだのは、それが《善》でなかったからではない（不当な社会は際限なく続きうる）。ではなくて《真》でなかったからである。より正確には、それが虚偽であることが明らかになった、人間と社会に関する仮説に基づくものであったからである。

その不条理性が早々と誰の目にも明らかになったこの仮説は、経済に係わるものである。完全に中央集権化され、計画化された経済の失敗は必至であった。そういうわけで共産主義体制は周期的に体制原理そのものを否認する《NEP》¹⁰タイプの政策を余儀なくされた。彼らは、経済的要因から生じる何らかの自律を阻止するため、そうした政策がもたらした富裕化のわずかな傾向さえ、これもまた周期的に抑制せざるを得なかった。この点からみれば、慎重にイデオロギーの命じる経済計画を背負いこまないよう配慮したナチズムは共産主義よりも際立って能率的だった。中国の《市場共産主義》は従兄弟のソ連よりも遙かに長く維持されうるであろう。

この人間学的あるいは心理学的な性格の仮説は、確かなものでないにも拘わらず、恐らくより重要な役割を果たしてきた。人類は《生来》自由を希求するというのは恐らく真実ではない。われわれは、如何なる意味において逆の主張を支持することさえできるかを見てきた。その代わり二〇世紀の（伝統的な社会と異なる）ヨーロッパの住民は自律の実践を熱望し、自分が行動の主体でありたいと考え、そのため全体主義国家に強要された服従は、長期的に彼らを満足させることができなかつたのは確かである。われわれは植物を強いて横に生

えさせることが出来る、とルソーは言った。強いることをやめた途端に植物は頭をもたげ上方へと伸びてゆく。個人は終生おびえさせられ、最早再び頭をもたげたくないと思ふかも知れないが、あらゆる《教育》の作業は、子供にあるいは隣人に対してさえ、再開されるべきであろう。

社会は《必然的に》、各々が他のすべての人々を犠牲にしてひたすら自分の権力を拡張しようとする、万民に対する万民の闘争の場であるというホッブスのかつニーチエのウルガタ①に甘んずることはまた、凡庸なる思想家ぶりを示すことになる。それは、《他者》が除去すべき障害あるいは服従させるべきライヴァルでしかなく、個人が自分だけに満足する人間の超個人主義的な観念を取り入れるのと同じことになる。ところで、このような孤独な満足は幻想である。われわれは彼らの眼差しから自己の存在の確認そのものや自己の価値の承認を受け取るためにも、《他者》を必要とする。それゆえ、こうした他者を労わらなければならない。そしてそこでは恐怖政治は何の救いにもならない。人間は見知らぬ人から評価され尊敬され、周りの人から愛され大切にしてもらいたいのである。そのためには、大きな力を好きないように使うだけでは不十分なのだ。モラルは完全に《人工的な》ものであり、社会の慣習への単純な服従であり、われわれの貪欲や野心が被った仮面であるとするエルヴェシウスやニーチエに見られる仮説もまた、誤りであることが明らかになった。そうではない。正・不正の感情は強制なしに人間精神の中に生まれるのである。数年間眠ることがあっても、呼び覚ますにはほんの少しの切掛けがあれば充分なのだ。そういうわけで、過去の全体主義の《不完全》で不十分な性格は既に説明された。権力のあらゆる階級で、驚くべき反応を示す誠実な人間を見出すことは（稀とはいえ）可能だった。外国人との接触が増えた時から、離反者の出現も増えた。それは東側で生き残るために西側の周知の事実頼る

精神的反対者たちであった。

それでも、単に生き残るために服従せざるを得なかった人々が、権力の支持を止めたせいで、共産主義の権力が崩壊したわけではない。彼らの大多数にとつて、自由願望は死の恐怖ほど強いものではなかった。理論上、屈服せる何百万人は孤独な専制君主より強い。実際には、個人は警察、軍隊、党の圧倒的な組織に対して一対一で対峙していた。体制の終わりはほかのところでは決まった。それは精神の全般的な進展においてである。体験的現実と公的表示の間で広がる隔たりがついに変動をもたらしたのである。反対者は一般大衆からノウメンクラトゥーラにまで及んだ。体制はすべてに備えていたが、次のようなことは想定外であった。最高首脳がいつか、彼の利益になるものよりむしろ押し付けられた良心の声を聞き入れること、反抗者に発砲するのを禁止することなどである。体制の終焉を告げる鐘の音が決定的に鳴り響いたのはその日のことであり、恐らく意図せざる墓堀人の名はミハイル・ゴルヴァチョフと言った。

共産主義的全体主義の崩壊がある意味で、誤りに対する真実の勝利によつて説明づけられるとすれば、それは絶望しないための幾つかの根拠を提示しうるであろう。われわれは樂觀主義者であると認めるのではない。その体制は数世代にわたつてしっかりと維持されてきた。ところで各々が生きるべき生は一つしかない。単純に、最悪は避けがたいものでも、取り返しのつかぬものでもない。人間とその社会の存在そのものにおける何かは、常にそれらが自己破壊にはまり込むことを妨げることができない。

ポスト全体主義の憂鬱

一九八九年ポーランドからブルガリアにいたる東ヨーロッパの国々で繰り広げられた政変は、こうした国々の運命が彼らにとって掛け替えのない人達と、またそれ以上に、自らが正義の闘争に関与していると感じていたすべての人々のみを喜びで満たした。共産主義の抑圧の四五年が終わったばかりであった。人類の歴史の陰鬱な一ページがめくられたのである。情況はやはりどこでも不透明であったが、それらすべての国々が同じ方向に歩んでいて、その動きは以前のものより好ましいものであることは確かであった。変化は予期せぬ形で到来しただけに、喜びは大きかったにちがいない。人々は変化の到来をもはや信じられぬほど久しい前から待っていた。共産主義的全体主義が、永遠の存続を確かなものにしたと思われるほどの様式的完成度に達していたからである。

まさにその時点ではみんな喜んだ（私はその政変当日ニューヨークにいたが、トロントからの電話でジヴコフの失墜を知った。トロントにいた友人ミッコがブルガリアの近親者から情報を得て、そのニュースを喜んでくれそうなすべての知り合いに電話したのであった）。しかし数週間後、その歓喜の感情にはある種の憂鬱も入り混じっていることに私は気付いた——全体主義への郷愁めいたものとは全然関係ないのだが。その憂鬱感、政治的解釈もしくは経済的分析によって考察されるものとは異なるレベルに位置するものであった。つまり、個人的体験のレベル、私的であると同時に万人に共通の生理的なメカニズムのレベルである。

東側の国に属しているか西側に属しているかによって、様々に体験の形は異なる。西側の国々に関することとして、パスカル・ブルックナーがその著『民主主義の憂鬱』で示したように、その体験は本質的に敵の消滅

に基づくものであった。全体主義は民主主義にとって理想の引き立て役であった。その崩壊は空白感を生んだ。人が一つの主張と闘うことで、あるいは単に自明のことにようにそれに従うことで生涯を過ごすこと、人はその消滅によって当惑する。民主主義の思想そのものが多大なる論争性を失ったのである。東側諸国の国籍保有者は少し違う形で同じ体験をした。私としては、これら二つの態度の間で絶えず揺れ動いているのだが、私がここに書き記したいのは体験の《東方的》ヴァリアントである。

すぐにも申し上げておかねばならないのは、私が反応を把握しようとする人々にとって、ポストー全体主義の憂鬱状態は、国境解放後に姿を見せた物質的資材に対する熱狂を前にした憤慨に由来するものではない。西ドイツの店で買物が出来るようになった途端に殺到した同国人に対し、ドイツ人の数多の知識人や政治家は厳しい言葉を発した。彼らの言を信じるなら、市民としての美德はバナナのための投票ゆえに低下し（オットー・シリー）、モラルの高揚はチョコレートの中に埋没した。自由に対する憧れは、かつて抑圧されてはいたがそれでも品位のあった大衆を《西側の店の金びかの装飾品に密集した列をなして進む群れ》に変えてしまった（ステファン・ヘイム）。最も基本的な消費財の恒常的欠乏が作り成す人間的屈辱を忘れたか、あるいは知らなかった人々のように語るのは許されない。沈黙し敵意を含む行列の屈辱、彼らが店に入るのを見て怒っているように見える店員が押し付ける屈辱、必要でないのに目につくものを常に買わずにはいられないことの屈辱である。消費財の徹底的な窮乏は個人の倫理的尊厳に打撃を与える。店に殺到しながら、東側の住民はさほど腹を一杯にすることを考えているのではない。彼らは、西側の消費者がもはや味わうことのない自由を楽しんでいるのである。それほど自由は西側の住民には普通のことなのだ。

これから話す憂鬱はほかの場所に根を張っている。現在のリアクションを前にした羞恥の中でなく、近過去を吸収することの困難と、近未来が呼び起こす不安の中に。

ヴェスコという私の友人は、最近自分がモーパッサンの小説『首飾り』の主人公になったような気がすると言った。つましい収入の若い人妻が、舞踏会に着けて行くためある裕福な知り合いからダイヤモンドの首飾りを借りた。不運にも彼女はそれを盗まれてしまう。彼女は宝石を返すことが名誉にかかわることと考え、巨額な借金をして同じような首飾りを買った。彼女の残りの人生はめっちゃめっちゃになった。借金返済の人生になったのだ。数年後、生活が破綻に瀕していた頃、彼女はかつての恩人に出くわし、彼女に誇りを持って一部始終を語る。《まあ、可愛そうな人、と夫人が驚いて言う。ダイヤモンドは贖物だったのよ。あの首飾りは二束三文の代物なの。》

全体主義崩壊の直後、過去をきっちり清算しなければならなかった。目前に回避し難い力があると考え限り、苦しみが意味を持つ。見かけ以上に悲劇的な気の利いた言葉に沿って人々が、共産主義は資本主義から資本主義に至る曲がりくねった道であった、と言ったその日から、旧全体主義国家の住民はあの生活の意味がもはや分からなくなつたのである。対比をはっきりさせるために、古典的様式の争いをしばし想像してみよう。褐色人が赤色人の国を侵略し、屈服させ、彼らを苦しめる。赤色人は力を結集し、戦いを挑み、今度は赤色人を圧倒して自らを解放する。敗者は報いを受け、勝者は輝かしい勝利を得る。すべては単純明快である。ところで、共産主義の崩壊にとつてはこれと似たようなことは何も起こらなかった。問題となつたのは勝利というよりむしろ、誤り——人間の生涯時間にわたつて続き、殆どの住民がその共犯者となつていた——の認識であ

った。住民は風車と闘かい（あるいは大方の場合、彼らは風車のために苦しんだ）、偽物の首飾りに高額を支払ったのだ。勝利者は、贅辞同様憐憫に値する。

精神的に混乱しながらも、人々は解決を求めて手探りしていた。意図的な抑圧の悪癖という更に大きな悪癖に落ち込まぬよう、全員が感じている漠然とした有罪性をどのように乗り越えるのか？ある人たち——概して最も関与の薄かった人々——は残酷な非難を自らに向ける。また別の人たち——概して特別鈍感な道義心を持つ人々——は、同国人の過去の弱さに鞭打ち、復讐を求める。他の多くの人はすべてを忘れようと心に決めた。か、無益に苦しめられずに生活し続けるため、何も知らなかったということにしてしまった。なぜなら、自分を咎める気持ちがないことは、ちよつとした無気力、ちよつとした余分な同意、ちよつとした罪ある無関心ということになるからである。

過去を管理する

すでに長年月、私はブルガリアで生活していない。同じ情況であれば私がどのように反応しえたかは分からない。だから私は、日々の生活にそれを適用するつもりの人々にアドヴァイスをすることは差し控えたい。遠近ともに関わりある観察者としての私の反応を書き記すことしかできない。

集団的体験は三つのレベルに明瞭に弁別されてしかるべきと思われる。公的生活で役割を演じる歴史意識のレベル、合法性と正当性のレベル、最後に各々に課される心理的試練のレベルである。

一番目から始めよう。どの社会も過去に責務を負っている。社会は決定的にそれが消されることを妨げなけ

ればならない。それは現在を過去に従わせることでも、過去のあらゆる教訓が等しく推奨すべきものとすることでもない。共同体の過去における集団的記憶は通常二つのタイプの状況を止めがちである。われわれが勝利のヒーローとなった状況、乃至は無辜の犠牲者となったそれである。双方ともが現在の権利の要求を正当化し得る。ところで現実でありうるこの状況は、われわれを明晰にするよりもむしろ現在について目をくらませることに資するのである。過去の最も悲惨であったページは、われわれがそれらのページを読むことを受け容れさえすれば、最も教訓的なものとなる筈である。過去が実りあるものとなるのは、それが怨恨や自信過剰を養う時でなく、その苦い味覚がわれわれ自身を変えよう導く時である。国民は、繰り返し思い起こすためや、今の権利の要求を正当化するために過去を回復すべきではなくて——そうなると復讐と仕返しのみを果てしの無い循環を引き起こす。バルカン半島の戦争が、厳密な意味で文字通りの記憶によって引き起こされた災厄の好例である——、そこに未来を見据えた教訓を見出すために過去を回復しなければならぬ。つまり、過去の不正に深く思いを馳せながら、正義そのものの理想を生き返らせるために、ということである。いずれにせよ過去を知ることから始めなければならないのは事実だ。

旧共産主義諸国では、市民平和の名において、過去に対する関与の拒否を勧める声が立ち上った。そのような発言をする人々には目先の個人的利益しか見えていないのであり、彼らは単に、今となっては逆に罪悪と思われるものの痕跡を消し去ろうとしているのである。そうしながら彼らは彼ら自身を苦しめているのである。《禿鷹》あるいは《死肉を食う動物》と捜査官を称することによって、彼らは悪事の影響力を確認する。彼らは秘密の政治を、より一般的には全体主義体制に特徴的な情報の集中管理の政治を永続させた（政治警察の行動

手段はそこでは《国家機密》に属していた。

精神の抑圧は個人にとつてと同様集団にとつても危険なことである。それは未来の爆発をはらんでいるからだ。過去を乗り越えたのであれば、まずはその歴史を確たるものにしなければならぬ。如何なる障害も真実の探求を妨げるようなことがあつてはならない。情報を広く伝播させることが、強制収容所に、したがつて全体主義に対抗する強力な武器であつた。今、後遺症を取り除くために情報の伝播を役立てなければならぬ。古文書（国家の、党の、警察の）が破棄を免れて、非常に錯綜した過去のイメージを再構成するために、様々なイデオロギーを信奉する歴史家たちがその古文書に自由に接することが至上命令となる。絶対的透明性以外に規則はない。社会全体にとつてよい効果を期待するのであれば、一般市民もそれを享受しなければならない。ポスト共産主義のドイツは、一定期間古文書の自由閲覧を保証することによつてその道を示した。勿論、友人と思つていた人々の中に密告者を発見する恐れはあつた。しかし最悪の暴露でも、疑惑や不確かさよりましなのだ。

二番目の問題は、旧体制時代の体験によつて最も目立つた個人に対して新国家が採用しなければならない法的態度に関係するものである。つまり、《敵》側にあつた、あるいはノーメンクラトゥラであつたような、互いに両極端に位置していた人たちへの法的態度である。犠牲者の場合は恐らく非常に簡単である。死んだ人——収容所内の殴打により、あるいはひどい虐待の結果として簡単に処刑された——は、戦争の犠牲者同様に敬意を表されるべきである。外国に逃げた人達は、あらゆる汚名が濯がれて権利が回復されなければならない。強制収容所のすべての被収容者は、彼らにもたらされた過ちに対する物質的損害賠償を受けるべきである。

こうした行為は過去の苦しみを帳消しにするものではないが、少なくとも苦しみに一つの意味を与え、不条理な不正の犠牲者であった人の気持を少しは和らげることができであろう。勿論、まったく不完全な慰めではあるが。一九七七年離反者憲章に署名し、結果的に労務者として引き続き一二年間働いたあのチェコスロヴァキアの知識人をどのように援助すればいいであろうか。現在彼は《名誉を回復され》たが、退職間近である。失われた可能性は決して取り戻せない。自分自身を最大限守りながら、順応することに一五年（三〇〇年、あるいは四五年）を費やしたまた別の人については、どう言えればいいか。蒙った損害をどのように見積もればよいか？彼にとって積もり積もったすべての迂回が何の役にたつのか？歴史の平面では、このような小さなドラマは重要なことではない。個人の生活では重く押し掛かる。一五年、それは長い、余りにも長い。

虐待者の運命は、非ナチ化の体験が示したようにより難しい問題を惹起する。第一の困難は罪の遍在に由来する。すべての、もしくは殆どの人々がナチズムに同意した国をどのように非ナチ化するか？多かれ少なかれ旧権力に関与しなかった判事、技師、行政官、大学教授をどこに見出すのか？共産主義の場合その違いは、勝利した連合軍がいらないということである。それは、各国が独自に片をつけることを意味する。原則的に、集団的あるいは個人的良心に関わる倫理的責任と、法廷だけに属する法的有罪性を明確に弁別しなければならぬ。この弁別はしかしながら、言うは易く行なうに難いものであると認めなければならない。ブルガリアの強制収容所組織の様々な責任者のもとに寄せ集められた証言の数々は、ほぼ戯画的な形でその難しさを例証している。誰一人自分に罪があると感じていないのである。カポの殺人者は、自分の意志を奪われて、上司の手の内の純粹な道具であると感じていたからであり、収容所の責任者は律儀に規則と指示を実行しただけであり、彼自身

大臣で收容所全体の直接のリーダーにして元内務大臣であった人物は、政治局や閣議の命令、あるいは最高首長ジヴコフの命に従ったからである。この元内務大臣の弁明は、他方では次のようなものである。彼はこうした行き過ぎた行為や頹廢、また当時の歴史的状況（激化した階級闘争、外国の脅威）の中では完全に適切なものと思われた共産主義的正義の傾斜を決して望んではいなかった。彼も側近の協力者も誰一人殺さなかった。が、被收容者が残虐非道なサディストの手に委ねられていることは知らなかった。罪があるとすれば横溢に對してであろう。責任は、われわれの手中で爆発する恐怖なしで済ませたい爆弾のように段階を追って高まる。しかし、最上の地位にいる者は最低の地位の者にそれを投げる。そして、ゲームが再び始まる。罪人、それは私ではない、隣人である。

こうした弁解の方式は何ら偶然に負うものではない。それはわれわれが全体主義の罪と称する構造そのものの忠実な反映なのである。通常の罪悪で生じるものと異なり、動因が単独で作用することは決してない。決定機関と実行者は画然と分かれている。したがって、決定機関の人々は手を汚さず、実行者の良心は傷まない。その上、決定機関の各々は、多くの強力な係官の間で責任を少しずつ分け合う形で、それ自体幾つかに細分化されているのである。上層部では、内務大臣が新たな收容所設置を提案する。なぜなら彼は、一等秘書官がその提案のないのを不思議に思っていると信じたからである。秘書官は逆に、そのようなことはないほうがいいのと思いつつも、その提案は強制であると信じてしまうのだ。下層部では、朝、受刑者の頭に最初の一撃を加えたが、殺さなかった。彼は少し叩くに止めた。それが自分の仕事であり義務であるからだ。夜、その同じ受刑者の止めを刺した男は、瀕死の苦しみから彼を解放するために憐憫の情から行動したと思つているので

ある。以上両者においては過剰な官僚主義が、実際の恐怖を無味乾燥な統計的データに変容し、権力の頂点から発せられる抽象的な指令を日常的な体制用語に翻訳するのに利用されている。

責任は各々の活動に従事した多数の係官に分散している。だから、その方針から具体的結果までの全体として責任を考えることは誰も出来ない。そんな風に誰も厄介な問題を自ら背負い込むことはなかった。昨日メカニズムの効果を保証していたものが、今日は係官の無処罰の気持ちを保証するのである。

こうした虐待実行者の連鎖に沿った責任の細分化、したがって稀釈化のほかに、非常に重要な別の障害が、かつての刑の執行人に対する法的追及を困難にしている。それは、彼らも法の枠組の中で行動したからである。若干の職能的越権を除けば、彼らは上司に従い、最も忠実に法に従っただけなのだ。サディズムの過剰行為について言えば、それは概して指示によるものということどうやむやになった。この件についての追及は年を追って稀になっていった。

旧共産主義の国々に、人類に対する罪で被告を告訴したニールンベルグ裁判のような（あるいはフランスにおいてバルビーやトゥビエを裁いた裁判に似た）法廷を設置する提案がなされたのは、この法的な二重の困難を回避するためであった。そうなれば効力ある法への服従も、行為の古さも訴訟手続きの中断を正当化しえない。ここでは人間性に対する罪についての論争の本質には立ち入らないが、私はこのような解決法はこの際あまり望ましくないと思う。彼らが許可し更に培養した強制収容所と暴力の形態は、全体主義のシステムの類廃ではない。それはシステムの本質的な一面であり、論理的な帰結、凝縮された表現である。強制収容所を管理していた者たちが、企業や国の小さな自治体を運営する人たちよりも非論理的で過激であったわけではな

い。全体主義国家がある人たちを抑圧の係官に任じ、別の人たちを政治的《幹部》に任じたのは偶然のなせる業である。一方が他方より下劣でなかったとか、悪意がなかったということではない。われわれは全体主義国家の一部分を非難することも、他の部分に触れずに済ますことも出来ない。なぜならすべてが関連し合っているからである。他方、四五年間営々と続いた一国家のすべての公吏に有罪判決を下すことは出来ない。そのような程度にまで範囲が広がると、罪は処罰から逃れてしまうのである。

注

- (1) *Le Coin plaisant* ヘンリー・ジェイムズの小説 *The jolly corner*
- (2) Ernest Renan 一九世紀後半テームとともに科学主義、実証主義の思想家として同時代の文学者に多大な影響を及ぼした。特に、キリスト教を歴史的事実として捉え、超自然や奇跡などを否定したことで有名。
- (3) Tshéka 一九一七年設立の全ロシア非常委員会で、二二年ゲーペーウーに改組された。
- (4) Stasi 旧東ドイツの国家公安局。
- (5) La Boétie エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ 一六世紀モンテーニユの賛嘆の対象であると同時に、彼のよき助言者であった。ラ・ボエシの名を後世に残すことになった著書『自ら屈従することについて』は、暴君の圧政を激しい口調で論難したものであるが、宗教戦争当時新教徒の王朝攻撃に利用された。
- (6) Vaclav Havel 二〇世紀中葉に活躍したチェコの劇作家。現代社会の不条理性に取り組んだ作品を残す。思想的軽犯罪で有罪となるが、理想を放棄することを拒んだ。
- (7) 原著者による注 すべての抑留体験者の証言は、取り消しの指示がないかぎり『人民の名において』選集 (Antho.社、一九九二年) から抜粋したものである。

- (8) kapo ナチス強制収容所の収容者主任。
- (9) guerre des étoiles 人工衛星の打ち上げ競争。
- (10) NEP 旧ソ連で実施された新経済政策。
- (11) vulgata ウルガタ聖書から転じて、公式的聖典の意。